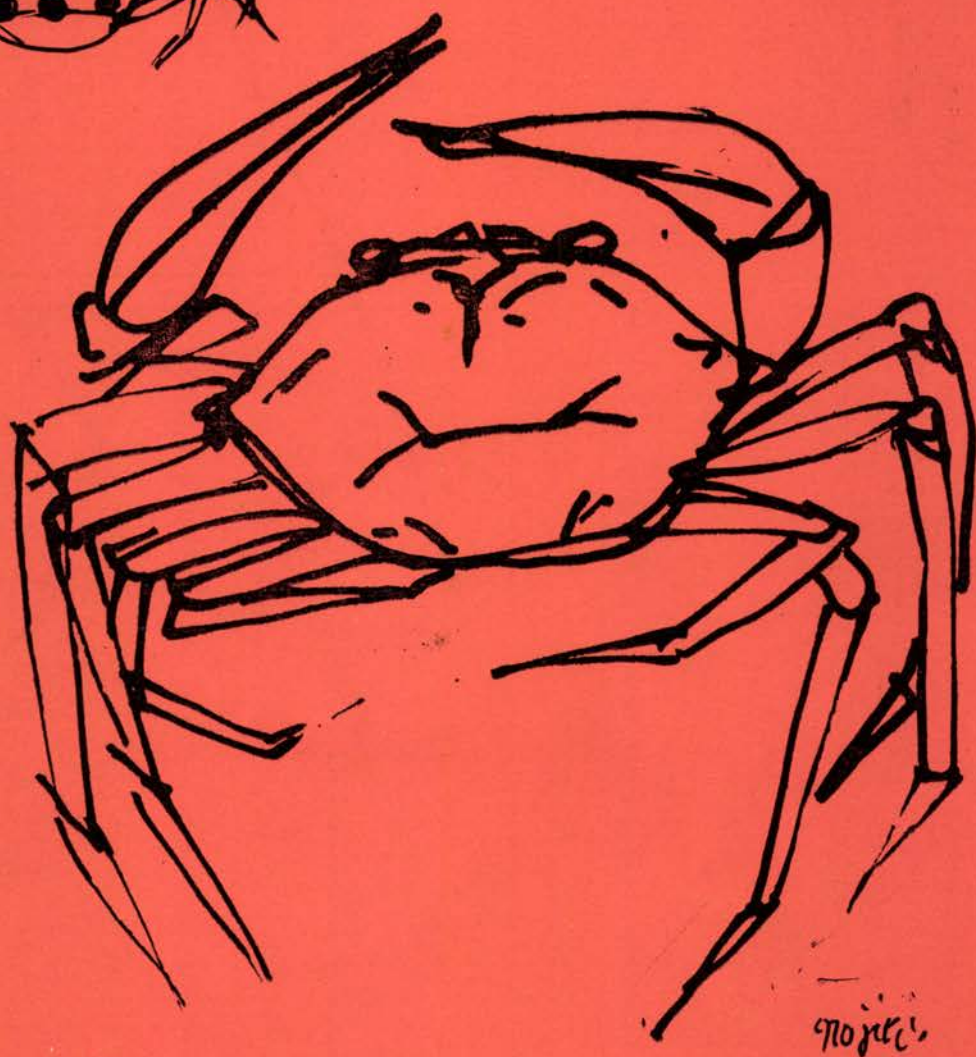
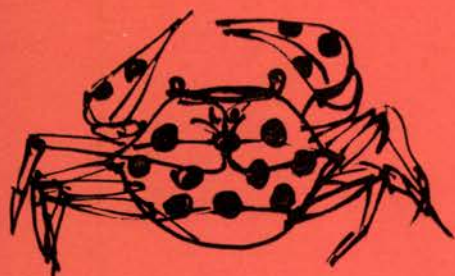


証雅の柳川



五月号

麻生路郎☆主筆

No. 408 Pensoj flugas trans la land-limon
THE SENRYU ZASSHI

川柳雑誌社主催

本社五月句会

6月本社句会

兼題
貸し傘
厄除け
踏み台
手探ぐり

今月は八日が句会日です。

日時 五月八日(月)午後六時

会場 関西会館(77400番)

大阪市天王寺区上ノ宮町四八

(天王寺電話局東隣り)

道順 市電上本町八丁目下車(北へすぐ東側)

近鉄上本町六丁目南へ約百五十米東側

兼題 「レジャー」(三句) 麻生路郎選

(路郎選に限り七時出句切厳守)

「夕焼け」(三句) 菊沢小松園選

「店番」(三句) 後藤梅志選

「小金」(三句) 真鍋一瓢選

席題 三題(当日発表)

柳話 吉田圭井堂

呈賞 ☆各題天位・☆路郎選天位に不朽洞賞カップ

会費 百円

幹事 紫香・淡舟・いさむ・潮花・文秋・庸佑・狂二

・与呂志・白水・水堂・すむ・薫風子・水断

・柳宏子・舟遊・一三夫

★投句だけの方は郵券三十円

同封(切五月六日)

大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地

川柳雑誌社句会部

電・住吉 6081



川柳まつり

特別課題「気軽る」

選路郎麻生(2句)
(句便者社日本末六月切・宛裏面に支部名雅号明記)

日時 7月16日(日)午後一時

会場 大成閣(電話 52387九番)

南区大空寺中五丁目二六

心斎橋大丸北ノ辻東五〇米北側

司会 松江梅里

開会の辞 若本多久志

挨拶 中島生々庵

兼題 「長寿」(三句) 麻生路郎

「外遊」(三句) 中島生々庵

「大阪」(三句) 北川春葉選

「作家」(三句) 土井文蝶選

「聖書」(三句) 西尾榮選

「天引き」(三句) 川村好郎選

(各題句箋別紙・裏面に雅号明記六月末日本社普便のこと)

席題 当日二題発表(各題三句)

★特別課題「気軽る」発表 麻生路郎選

呈賞 ☆各題天位・生々庵選天位に不朽洞賞

★特別課題優勝者・路郎賞 ☆優勝者所属の会に大賞券贈る。★優勝者は明年川柳まつり当日返書、出陣支度、連支部に知らせない様子が優勝した場合は川柳雑誌社の獲得となる。

余興 退つて発表 有志諸家

会費 百五十円(参加者全部におみやげ進呈)

懇親宴 会費五百円(同会場において5時半から7時までの予定)

★投句だけの方は郵券三十円同封(切六月末日)

不朽洞句帖

麻 生 路 郎

上に伸びる一方の筈の孤独

日記空白 今日には疲れただけのこと

デパートの中二階へ来て欠伸する

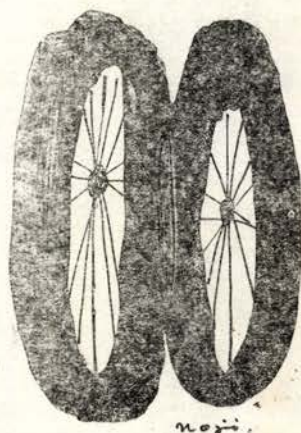
僕と天皇 だいぶ近かしい気がしだし

死にかかっている妻を養う身

一徹な養子も語尾はにごしとき

長男の自殺ギターはそのまんま

昔の女にとうとう死にやはったかと云われ



川柳雜誌五月号目次

★柳樽室	一路集	入門講座	各界展望	金泥集	近作柳樽	同舟近詠	川柳塔	不朽洞の人々	絵と川柳で表現する歴史	五月の風	火の玉の話	周辺	近畿の春	玉藻の前	★現代柳人録	友を語る	前の魚	私が豆であつたら	柳界あれこれ	東京座談会	先生と九十分	川柳「天」「地」「人」	名句と難句	不朽洞句帖
(46)	「社用族」 「味方」 「ウインク」	(38)	(38)				★							(35)										
▼ベンの散歩	森下愛論選	清水白柳	★不朽洞会から	麻生菰乃選	北川春巢選	麻生路郎家	諸家	戸田古方	梅志氏の巻	雄々・水客	酒井ひか平	日満・一三夫	東野大八	富士野鞍馬	今西生薑	堀口堧人	武部香林	塚越迷亭・高須岨三味	伊志田孝三郎・富士野鞍馬	米沢曉明	戸田古方	麻生路郎	麻生路郎	麻生路郎
(46)	(37)	(34)	(46)	(41)	(40)	(20)	(11)	(32)	(39)	(26)	(20)	(30)	(26)	(28)	(18)	(40)	(16)	(14)	(12)	(29)	(25)	(4)	(3)	



影 畫 館 青 (影 畫 館 青)

川柳 名句と難句

麻 生 路 郎

腰かけの呑み屋であらう。

「この塩味、とてもいいよ。もう一本お代りだ」

と味をはめられたので、自慢するかと思うとおっさん、ニヤッとしただけだったと云うのである。ただこれだけのことをつかんで、薄暗い呑み屋の情景を浮彫りして見せる手腕は大したものである。

〔一五七〕

ひとり子へガールフレンドばかり来る

(香林)

「健坊いる？」

と訪ねて来るのが、ガールフレンドばかりでは

「お父さんが、いないんだし、ひとり息子だからもし間違いでもあっては」と未亡人の母が心配するのもムリはない。

「大丈夫かい。健坊」

「大丈夫だよ。」

「それだったらいいけど、ホントに大丈夫だネ」

「ホントだとも、何んとも思っちゃいないんだ」

「それだったら、おっ母さんも安心するけど」

と、こんな会話が絶えず繰り返される家庭風を巧くキャッチしていると思う。

〔一五八〕

〔一五四〕
ほくの富士子さんを雷蔵が抱き

(夢 虹)

市川雷蔵が山本富士子を抱いた映画の一幕を眺めた、富士子ファンの彼は嫉妬と

羨望の眼で、思わず溜息をついたに違いない。それは、その昔、娘義太夫のあとを追うたドゥッスや連と同じ心境で、どうすることも出来ないとは知りながら血を湧かさずにはいられないのだ。この句はそうした映画ファン心算をズバリと描写している。しかも「ほくの富士子さんを」という措字がこの句を生かしていると思う。

富士子さんを雷蔵が抱いた映画の一例としては泉鏡花原作の「歌行燈」がある。次に、二人の映画人を簡単に紹介して置く。女優山本富士子は昭和六年十二月十一日

に大阪で生れ、出身校は京都第一高女である。昭和二十五年にミス日本に当選、昭和二十八年に大映に入社、その初演は「花の講道館」である。現住所は東京都渋谷区代々木初台五四二。

男優市川雷蔵の本名は太田吉茂。昭和六年八月二十九日に京都に生れ、出身校は大阪の天王寺高校である。昭和二十九年に大映に入社、初演は「花の白虎隊」である。現住所は京都市右京区鳴滝音戸山町四ノ八。

〔一五五〕

親友の見舞ベッドへ腰をかけ

(東 岸)

療養生活の友を見舞ったら、患者はベッドの上に起きなおっていた。

「ここへ掛けろ」

と友は自分のベッドをゆびさした。

「だいたいいいかい」

と云いながら病人とならんでベッドへ腰をかけた。

「あすは手術だ。」

と友は淋しく笑う。

「彼女は知ってるのか」

「ウッソ、云ってやらないからな」

「あとでおこられるよ。オレが知らしてやるよ」

と、云ったような会話がいつまでも続くのである。

かくて病室はたそがれて行くという情景が巧く描かれている。

〔一五六〕

味ほめてやるとおっさんニヤッと

(豆 秋)

靴はいているのにサヨウナラサヨウナラ

(木客)

料亭の支那風景を詠んだものだろう。

使いなれぬ長い靴ペラなので、ズズズズと送って出た仲居から

「サヨナラ、サヨナラ」

と背なかへ、浴びせかけられたので、あんまりいい気持ちがしなかったのである。

「しまった。もう少しチップをはずせば、こんなに、ひがまないでもすむんだった」
 と思うても、あとのまつりだ。なかなかユーモラスな句だ。

〔一五九〕

一円は銭の音では落ちられず

(一瓢)

近ごろの一円ぐらい軽視されるものはないかろう。外の硬貨であれば、床へ落ちてもしっかりと音がするが、アルミ貨の一円ばかりは、木の葉が散るように、ふうわりと落ちるので、銭の音では落ちられないと、安っぽく見られたのである。

一円足らいでも電車に乗せてくれないし、一円の効用もいろいろところで発揮するものだが、銭の音では落ちられぬとは、一円貨にとってはなさけないことである。人間にもこんな人間がありはしないか。

〔一六〇〕

好きなればこそ新劇女優ピラも貼

カモはお客の隠語である。

(木京)

新劇女優と云えば、松井須磨子が、大久保百人町へ洗いざらしの浴衣で舊古に通っていた頃を思い出すが、新劇運動は、もと

もと経済的に恵まれていなかったたので、ピラ貼りどころか、食うや食わずの経験もしているのである。

それこそ、好きなればこそである。この句は単に新劇と女優だけの問題には限らない。せち辛い今の世の中で常にわが道を行こうとする人々には、ピラを貼るぐらいは何んでもないことなのだ。そこに「好きなればこそ」の穿ち味があると云うもの。

数年前、大阪に落語の研究会が生れた。

その第一回に出かけて見たら、御大の染丸がニコニコして下足をとっていた。好きなればこそそのよい例である。

〔一六一〕

そのカモを絞れと女将から指令

(喜由)

「ダラダラしてるじゃないの、あんたにスツカリまいてんのよ。ウンと絞ってやんなさい。」

と女将からささやかれたのである。この句の場合、指令という硬い言葉を使ったのは、スト指令を真似たもので、新固として決行せよと云うところか。

〔一六二〕

歌麿のころから女つるをおり

(木府)

女の性格の一面をつかんだ句だ。今でも女の病棟を訪ねると、沢山つるを折って、天井からぶらさげているのを見かけるが、昔ほどの情緒は感じられない。むしろ、この句は「歌麿のころから」の措字に魅力をつないでいると見ていいだろう。

歌麿は江戸中期の浮世絵師で、一七五三年に生れ、一八〇六年に没している。姓は喜多川と云い濃艶な女性美を表現したので有名であった。代表作には高名美人六家撰、娘日時計、青楼十二刻などがある。

〔一六三〕

カレンダー妻には妻のしるしあり

(求女)

宿六のカレンダーには、仕事で会う日遊びに行く日、宴会へ出る日

が、しるされるが、同じカレンダーでも妻には妻らしい法事の日、デパートへ行く日、婦人会の日などがしるされていると云うのであろう。一つの発見には違いない。

〔一六四〕

大臣の眼に俺たちは数字

なり

(清生)

国勢調査の時は一人であり、選挙の時には一票であり、大臣の眼から見れば確かに、

私たちは数字に違いない。あれも統計、これも統計で律せられて、個人として認められる場合は殆んどない。作者は大臣ぐらい冷たくて殺風景な人間はいないことを云いたいのであろう。

〔一六五〕

御信頼申し上げてたまにヒス

(多久志)

夫の浮気ぐらい妻の神経をいらだたせるものはない。昔から男は事業、女は恋愛と云われているが、夫の愛情以外に女の生きる道はなかったからだ。

毎晩のようにお婦りが遅くなる。うちの人に限ってと云う信頼はしていても、たまには嫉妬のはのが燃えあがらずにはないのである。



結婚式場
長生殿

神楽2 控室16 更衣場
(和洋9) 御待合室・更衣室・美容室・写真室のほか、貸衣装一切を完備しております。●6階

金明
松坂屋
大阪日本橋三



豊中市 戸田古方

それもエンジョイなめられてみる
目分量の縮尺えろう狂るていず
考えるたのしみ結び目とけてこず

大阪市 市場没食子

ああ医師も遂に鉢巻ブラカード

甥の結婚

その気ならワシがと媒酌買つて出る
新家庭訪えば映画に行つて留守

大阪市 土井文蝶

ハンドルを持つ身徐行の事故現場

阿呆な金使うて帰る午前二時

駈落ちは京に居ますと金の事

西宮市 若本多久志

株買えば儲かるように女房言う

体裁のいい嘘ばかりでマダムなり

まあまああ生活で電気冷蔵庫

大阪府 川村好郎

わたしかて言い過ぎましたとお茶を入れ

三十年かつつながら肉とねぎ

教えずとも母乳吸い込むおそろしさ

恩師帰幽

額けば今日も遺影に励まされ

大阪市 正本水客

鉢巻をとって喫茶へはいってき

黙殺ということにしてけりがつき

人形のように嫁いでからのこと

早春の小駅で汽車がすれ違い

大阪市 丸尾潮花

裾ひいた化粧がしたい女学生

傘たたく雨さえ春の音で降り

大阪市 西いわを

麻雀で夜は我が家の人ならず

送別会主賓ベコベコするばかり

先生先生と酔がくどくなり

岡山市 武部香林

心頭滅却そんな難事でないと知り

来るとこへ来ている安らぎの無色

無に停てば眼のないことも忘れてい

大阪市 北川春巢

親類がみな長生きで気が強し

その他大勢になっているむずかしさ

結婚は解消月賦はとりに来る

長男高校卒業

卒業はこれから朝寝しておれず

ホノルル市 白砂旋風

一世は桜見る金株を買い

人生はバクチだったと九十二

大阪市 須崎豆秋

歯車の一つ缺けるとお陀仏か

同病の死を黒棒に見る寒さ

お水取りすめば癒ると思ひ込み

瘤かいなハーンと思う見舞客

それとなく生きてるうちの形見わけ

ホノルル市 羽佐間柳葉

片恋は転ぶ水銀摺むよう

真相を発く活字は派手に組み

堺市 吉田圭井堂

下つても上つてもよし持っていず

水屋が出入りするのほうちぐらい

目を放したら判るものかと婦人会

山口県 国弘平休

披露宴までを他人として並び

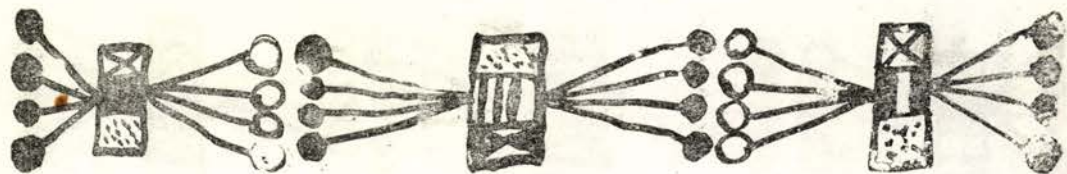
望見棲波の音より恋の唄

防府市 長野井蛙

人波を逆に泳いでスリ稼ぎ

鉢巻をしてから道徳口にせず

師の影を踏まぬどころか吊し上げ



ダンブカー相手がよけるものに決め

岡山県 直原七面山

訴訟好きの父親が居て売れ残り

当っても寄付はせぬ気の宝くじ

葬式の指図までして祖母は逝き

黙して語らざるがゆえに富士は尊し

大阪市 西森花村

写生に行く気ベレー帽買ってくる

もうババは此処で待ってる動物園

鳥取市 河村日満

パチンコで棄てる度胸もなく歩く

和を説いてわれ尚労組委員長

豊中市 足立春雄

旅の妓は娘と同じ年と言う

折るよりはましな捻挫でスキー済み

忠兵衛が理解出来ずにカミユの子

下関市 石川侃流洞

どうせにらまれてるからストの先に立ち

倉敷市 木村千容

呼吸しとる限り年金つくという

涙みな枯れてと臨終他人めき

加賀市 野村味平

愛妻の詰合一つでおし通し

仲よしでどちらもやがてママとなり

大阪市 木村水堂

金持ちの苦勞がわかるほど溜り

高校の道徳観と対立し

叱らない父の枕に薬瓶

高槻市 福田丁路

我れに続けと叫んで飛ばす総人歯

大阪市 真鍋一瓢

下手な随筆載せにゃ籍りたい名が籍れず

嘘でない話する程仲居酔い

世も末の配らん上にポスト焼け

炭坑事故続発

合の手は念仏でやる炭坑節

大阪市 後藤梅志

人事の葛藤と気がつけば淋し

道まちがえたらしいここいら梅の里

灰皿になるものがない工具店

米子市 小西雄々

好きな娘に逢えなくなった時差出勤

婦人科医噂さどおりの家を建て

ザーマスが証券会社で暇つぶし

デパートがすめば株屋に寄るブラン

此の家はアパンらしい朝のかしわ手

島の内みみずも休くねらせて

淋しくなるから何もかもうぬぼれておく

阿呆んだらと一べん叱られてみだし

税務署の前であわてて指輪ぬき

大阪市 金井文秋

厩にも運は努力で待てとあり

団地族ピアノをどこへ入れる気ぞ

よそのスト社長機嫌を取りに来る

加賀市 那谷光郎

低治療させて仁術強いられる

姉女房の世話に甘えてまだ飽きず

下関市 桜川不水

少年におびゆ大人におののきつ

女房の地力を知った貧の底

岡山市 浜田久米雄

斗争の深夜レールがよく光り

血圧へわが人生の先が見え

岡山市 逸見灯卒

赤チンを塗るも交通事故のうち

春浅き日の恋愛に花がなし

鼻先にある幸福が忘れられ

出雲市 尼緑之助

いい年齢を酒に力を借りんとし

黙々と一つのいのちの巣をはなれ

がめつさははったりもあり背を見せず

大阪市 水谷竹莊

四女出陣



美容師のお世辞嬉しく聞く見合

よしまかしとけと先生ひげをなで

十七才もう万才の種にされ

柳井市 弘津 柳慶

未亡人を売り物にしてナンバーワン

値上値上男もついに悲鳴あげ

鳥取市 杉谷 湖山

番犬がジロジロ俺を目送す

年なれや靴の重い靴を履く

八代市 佐野 ト占

猪の村へ左遷は荷をまとめ

恋たのしだまされてても恋たのし

京都市 大鶴 喜由

十七才大人二三歩退ぞかし

一生を托す鼻毛を仰ぎ見る

食欲と性欲追えど追えど蠅

土産の額と馳走の額と考える

奈良県 飯降 白香

膝を屈せぬ思も病でくずれゆき

汚れながらも私は生きたと教え子の

老いた雌になりたくない反抗し

奈良県 西辻 竹青

逆算をすれば続かぬ暮しむき

私の負けよと杯を受けつけ

呉市 林野 甦光

アイシャード今宵の客の物足らず

牛乳配達ここの主人をまだ知らず

脳病院へだまして連れて行く不憫

屠殺場へ行く牛わらじ履かえて

用心棒の犬に彼氏もはえつかれ

大阪市 阿万 万の

文化教室団地のひまを見逃さず

酒の広告も色塗りかえて春を待つ

神戸は神戸の型で人待つハイヒール

スピッツもよごれて場末のバーの昼

岡山市 福島 鉄児

手土産の要るお見舞を又延し

岡山市 服部 十九平

首吊りのあった枝にも花が咲き

予備校の桜無視したまま散らし

スト出来る組織が欲しい斜陽族

大学を諦めさした斜陽族

斜陽族古きモラルを頼りにし

広島県 山田 季貴

春斗一波早やくも処分遠慮せず

給料が直ぐつつ抜けの暮し向き

靴磨き路上の角で清く生き

岡山県 田村 藤波

針の穴通うて姑の座を下りず

高野山詣でが怪我をしてもどり

見島市 本田 恵二朗

見合では気取ってたわと老妻め

鈍感の別に残念がるでなし

話しかけるような弔辞のとぎれがち

京都市 松川 杜的

広重の絵のよう橋に雪が降り

旅楽し向いも同じ週刊誌

鳥取市 森本 法泉子

刑事今日悪党らしい顔で来る

岡山市 津田 麦太楼

老妻としんみり坐る嫁の留守

禿かくすベレーおつむへ乗つけとり

後ち添のピンクムードになじろげる

ズロースをおどけて見せる老妓なり

吹田市 橋本 幸男

長男誕生日を迎えて

子の誕生いとこはとこが来て祝い

堺市 高崎 雄声

宝くじへ淡い望みも十二月

一べつもくれず折込み釜の下

悠々迫らざるも輪か

島根県 藤井 明朗

磯の香を春風に乘せ和布うり

旅の宿女あんまにくすぐられ

レジャーあり過ぎて夫を煙たく見



岡山県 永松 東岸

社説また首相その他を叱つとり

個人的意見とやらをボスも言う

刺されては損と十代へ道開ける

癒らぬも健保のせいと思うとく

少うしは良いと医者へも言うておく

倉敷市 野田 素身郎

美しい看護婦痛い注射をし

朝早い掃除婦わが家は掃かず出る

退屈をしても家事を手伝わず

子を抱いて一步よろめく病上り

入院のおかげ汚職からはずれ

大阪市 伊達 堰子

脛かじり難波の宮とか堀ってます

用の無い茶店にさせるバス走り

慰さめる近所があつて続く嫁

河馬の顔待っても居れぬ観光バス

大阪市 不二田 一三夫

脱稿のタバコの灰は叱られず

春だなど妻の素足の白き見て

ペンとも筆ともインキのドライぶり

兵庫県 酒井 ひか平

浮気したかも知れないと脱ぎ初め

愛人の部屋深として留守であり

神戸市 丸川 初甫

恋人の腹たしかめて破談にし

ガム噛んでへっちゃんらできく破談

再婚を急いで急がぬ顔でいる

岡山県 池田 古心

農民は食えぬと言つて左派嫌らい

東京都 石居 高志

から空きのうちだけ飲屋酌いでくれ

セールの世界は厳し靴の減り

日曜大工結構高くつく夕餉

大阪府 早川 清生

下宿人を婿にし高島田を知らず

打ち明けて仲居に馴染一人減る

ドラマはすんだが人生はつづく

葬家辞して麻雀の顔ぶれとなりいたり

堺市 辻 圭水

盲点をつかれて返事又とちり

新仮名と旧仮名の世で住みにくく

金払うて住む家にさえくじがあり

大阪市 児島 与呂志

バチだこが素直な女にして置かず

先代のしつても変る計算器

西宮市 小浜 牧人

酒飲みのかだも聞いたる運転手

レジャーブームの春を月賦で身をかため

閑職を定年待ちは悟りきり

見習いはお越しやすから教えられ

病床のうれしや春の雲となり

大阪市 橋高 薫風子

失いしものと得しものこの友に

旅に出たし子に書く絵にも汽車電車

下関市 中村 九呂平

旅に出て妻の指図が無難なり

しくじりを逸話にされるほど出世

大阪市 榎本 落児

刺青をめずらしがる子を目で叱り

刺青が銭湯中を睥睨し

事なかれ主義が部下から見縊られ

鳥取県 田中 蛙眠子

パン食にかえて酒豪の名を捨てず

もうスキーやめなはれやと松葉杖

岡山市 林 葵丘

養子にでも行くかと親にも見下げられ

寝る前に計算するも一人旅

国鉄スト右翼へ同調したくなり

菜譜で

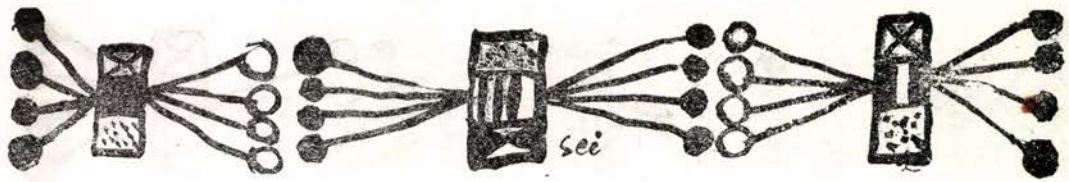
神戸市 仲 どんたく

きれい好きやつたと洗う母の墓

ハンドバッグおき場に隣の墓を借り

公園は満員墓はひっそりと

空航の別れは斜陽へ手をかざし



平田市 久家代仕男

倍增に自信が湧かぬ露路に住み

休診という日のベルがうるさくて

へそまがり雖でもむよな抗議する

閉店が近い仲居のふところ手

岡山市 江国 幽谷

巻紙へ金釘流で子をたのみ

金故に売けておっても好きになり

春らしく洗濯物が揺れており

岡山市 光 好陽子

軽音楽わかったようにうっとりし

西宮市 野 呂 鵜 汀

死別してたった一間が広過ぎる

年輪を刻んだ顔をほころばし

梅におう庭の眺めへ客があり

西宮市 樋 口 舟 遊

人間探求するにはまだまだ若すぎる

新潟県 高野 むじな

人に相談してて俺にも相談し

二兆円俺の税金迄入れて

使うた人やなあと云われるかくし芸

新政策とか物価ばかり身にひびき

高砂市 吉 原 紅 月

ハンドバッグの底まで検札見てもいい

電話だからシミーズのまま話し

春斗と別ポスターは花便り

大阪市 石 倉 旅 風

産んでおきながらお乳が出ませんの

さんづけて呼ばれるうちはまだ小物

物識りも宇宙の端は知らなんだ

大阪市 魚 住 満 潮

続 西成界わい(二句)

天下茶屋降りて女の足速し

高砂やたらふく飲んで皆帰えり

大阪府 林 昌 男

腰の線こうも男の目がねばり

馳け込んだ寒きウドンが音を立て

愛媛県 村 上 旭 童

さくらには間があり春斗第一波

ストライキ首きられても切られても

六十の昔もうけた事ばかり

倉吉市 大 前 鳴 恍

また来てネ仲居つめたい手で握り

鳥取市 北 村 三 歩

おっちょこちょいまた代表でしゃべらされ

神戸市 傍 島 静 馬

散髪屋息子刈ってる昼下り

六十でやっと芽が出て生きたがり

布施市 森 下 愛 論

梅なしと女口紅強く引き

覚悟した女静かに向きをかえ

岡山市 宗 高 矢 寸 志

教養費テレビを買うと皆削り

格式に負けて下宿で服毒死

遙々と見舞って話す事がなし

大阪市 河 井 庸 佑

観光バス今日は喪服の客をのせ

子の頭親の期待にそいかねる

大阪府 谷 沢 好 祐

流し込む酒は北風避けるため

病弱の為の辞表にウラがあり

泉大津市 高 津 徹 也

即席の家に住み即席の物を食い

好きな三味ひかせ病床こと切れる

愛媛県 榎 紫 光

無礼講の無礼翌日記びにゆき

成績が良すぎ野球へ踏みきれず

青森市 工 藤 甲 吉

二つの鍵の一つを持たす仲となり

ドレス買って貰い女にされちゃった

政治の貧困ラブレター遅れて来

未亡人けたものどもをうるさがり

羽田から簡単に発つ歌手女優

西宮市 門 永 三 舟

度胸なしと言われ年増に引っこかり



押しかけて無いがいとこを妻にして

玉野市 伊原明林

母子寮へ風が運んで来た桜

水筒で無事な花見の家族連れ

一陣の風を残すも女秘書

芸のない課長握手をしてまわり

松江市 小林孤呂二

オンパアも赤ハタ握るデモの列

二丁拳銃のしぐさテレビに負けていず

ようやくに騙されたを知った倍増論

松江市 舟木与根一

子と見てるテレビふいにキッスする

恋人が出来て顔芸うまくなり

神戸市 室田千尋

何も言わず居て人品は争えず

首を縦に振らぬを男羞恥と見

友情と恋との厚み考える

海静か誰れか私を呼んでいる

豊中市 林夢虹

恋二つ男は二兎を追うてみる

尼崎市 吉本善風

考える事が嫌いでチャンバラを見

電話すれば下請けは馳けて来る

長生きをせいととうとう見はなされ

西宮市 山本一傘

いいことがありそう春の空みていたら

年寄りの耳をくすぐるアリガタヤ

大阪市 今西生薑

閑人でなければ訴訟してられず

母なればこそその暦を迷信と

京都市 室井八九寸

マンモス法城人の波札の渦

奈良市 内海敬太

天職と思えとだまされつつけて来

文学を捨てて親父を嗣ぐと決め

老人の一票大きくものを云い

「奈良文芸」に入社

事大主義の作家をチョピリ批判する

岡山県 横山一声

春がすみ観光バスは山を縫い

組合費あげて賃上げストに入り

小松市 関戸宗太郎

婦人会ポットワインでまだ唄い

保健医を辞退増築はばかりず

ダンブカーもお役所とゆう走りよう

石川県 高山涼髪

株すこしおぼえて白髪だらけなり

あなたの子産みたいわとはおそろしい

卒業ヘデモできたえた長い足

美称市 安平次弘道

赤旗をビルの窓から見下げられ

白バイを巻いたと自慢する若さ

火葬場新築一番釜に罅され

南米へ夜逃げした叔父の遺産が米

同舟近詠

須坂市 高峰柳児

子が病んでから倦怠期歩みより

気晴らしに看護婦ストの列に入り

今治市 長野文庫

きつちりと端銭までとるレジスター

懸賞を見る立読みはすぐ帰り

宿直の間だけ畳のビルディング

老いらくの恋チョコレート噛り合い

和歌山市 秋月宏方

枯すすきはやった頃の恋でした

机並べた友と思えず自家用車

学歴に関係はないパチンコ屋

職業欄殺し屋してるとも書けず

新居浜市 月原宵明

みな許すようにバレエは身を委ね

春の雨足がきれいな蛇の目傘

参観日レジャー夫人と言う姿

宿直は課長の椅子で中華そば

塀と塀あたった音で盗み酒

名古屋
ダスト

伊志田孝三郎

富士野鞍馬

塚越迷亭

高須啞三昧

・東京座談会・

柳界あれこれ
(下)

狂句と時事吟・出典不明の古句・詩川柳のこと

-芝・武藏庵にて-

鞍馬 そうですヨ。しかし、狂句という名称は、四世川柳が、初めて、自分達の作る作品につけた名前、大体こういうものが狂句だというキメはないのですヨ。

孝三郎 我々は、川柳界へ入った当時「狂句百年のダラク」という言葉をおダイモクのように聞かされたが、何がダラクだか、よく判らなかつたヨ。

啞三昧 要するに、それは明治の川柳ルネッサンスに、文字・言葉の遊戯である縁語・掛調の十七字を排撃して、純正な文学運動をやろうとした、一時期の抵抗運動と見るべきでしょう。

孝三郎 そうですネ。それで、少し極端なぐらひに、狂句を目的のカタキにしたんですネ。

よく結って悪く言われる嫁の髪

なんて句ばかり、明治の人が作つたら、困りますからネ。

鞍馬 狂句という言葉について、故雀郎サンもちよつと書いていました、どうとう結論まで書けずに死んでしまいました。私もこの問題は、いずれ徹底的に書き

たいと思っていますが、独立した前句附の句に、名称がなく、最初は「前句」次に「川柳点」などと言っていたので、文白堂磯川が何となく「川柳風」と言いだし、四世川柳が「狂句」と名づけたのですヨ。所が、ここに問題なのは、

最初に作品があつて「こういうものが狂句だ」と規定したのではなく、ただ今までちゃんとした名前のなかつたものに、狂句という名前をつけて、今までと同じように作品を作るが「これからは、それを狂句と呼ぼうヨ」という風にきめただけなのです。それが、時世で、洒落・掛け言葉などが、どんな句になり、啞三昧サンのおっしゃる文字・言葉の遊びが多くなつてしまつて、ついに後年「狂句はダラク」と言われるようになったので、四世以後の作品にだつて、掛調でないよい句は沢山あり、初世川柳選句の中になつて、掛調のものはかなりあるヨ。

孝三郎 そうですネ。時世がもう平和になれた安楽な時代で、普通の会話でさえ「そうでありまの水天宮」だとか「そうか越ヶ谷千住の先だヨ」などと、無駄の多かつた時ですからネ。句は生活で、そういう生活の中で作られる作品に、掛調のものが多いのは当然ですからネ。それを、イチガイにダラクとは言えませぬヤネ。

鞍馬 その時分さかんになったカブ芝居の題名やセリフを見たつて、みんな洒落が掛け言葉ですからネ。「世はナサケ浮名の横ッシ」「仲もよし原」「縁はあさ草」等々、それを面白い、乙だと悦んだ江戸ッ子の作つた句が、さアことだ下女鉢巻を腹に

啞三昧
こんどは
ボクがテ
ーマを提
出しよう
それは、
それは、

此間「吾輩」でも問題になった、狂句の問題だがネ。迷亭は、それについて何か言つてたじやないか。

迷亭 ああ、水府・三太郎の座談会の事だろう。あれでは、三太郎は狂句を認めているんだヨ。

啞三昧 ボクは、その座談会での、読んでないんだが、三太郎サンが、狂句を認めてるつてのは

どういうんだネ。

迷亭 三太郎選の時事川柳に、狂句と言われるような句が入つてたんだネ。それで、それを水府が突いたんだらう。そこで、三太郎は、例の調子で「いまの世間が、狂句みたいな世間なんだ、それを詠む時事川柳に、狂句みたいなのがあつたつて、別に不思議ではない」つてな事を言つてるんだヨ。

啞三昧 そうすると、三太郎サンは、時事川柳に限つては、狂句を認めるつてのかい?

迷亭 そうらしいんだネ。その座談会で、水府は「句会をやつて天地人をきめて、賞品を出すのや

つたら、狂句だつてもかめへんやろ、その方が徹底しますワ」というような事言つてゐるのに対し、三太郎は「狂句つてもいい、もつと我々研究しなくちゃいけないと思ひます」なんて、今更らしく言つてんだヨ。何か、今までの川柳家が、狂句なんか、ちつとも研究してないみたいだろう。

啞三昧 ボクがどうしてその座談会に気がつかなかつたのか、不思議だが、それは「番傘」の何月号に出たんだい。

迷亭 たしか一月号だつたと思ふが「二つの顔」つて題じゃあなかつたかな。

締め

だったのは、あたりまえで、これがカッサイされたのは、モットモだと言いたいですよネ。



迷亭
ああ、その句で思
い出した
が、三太
郎が選ん
で新聞に発表した時事川柳に

鉢巻は天使、悪魔は腹巻し

つてのがあって、問題になったんだヨ。王使はモチロン看護婦だから、下女と看護婦との違いだけが三百年の距離かって事になると、ナルホド問題だよネ。

啞三昧 それなら「しなの」一月号で、民郎くんが「狂句の名の宿命」というエッセイの中で取り上げてゐるから、ボクも知ってるヨ。そこでは、その句の他に

国鉄は赤と白とにいじめられ

という句も上げられ、また初代川柳の漢句の中にも

指を切るからは九品の浄土

まで

起請とは裸にしようという事か

などがあると指摘して、鞍馬ザンの説と同様の事を書いているヨ。

鞍馬 そうですか。それは面白いですネ。是非熟読して、私も何

か書きましよう。所で「番傘」では、その狂句の事で、昔一年間も論争した事があるんですよ。それが相手が吉川サンだから、面白いでしょう。当時吉川雉子郎が、発表した

仏壇は後の祭りをするところ

ふさいでるように静かなハマ鍋屋

などの句について、水府は狂句だと言ひ、吉川側は狂句ではない、と言ひ張って、互いに譲らず、エンエン一年間もやりあったのですから、今から考えると、おかしいですよネ。

啞三昧 正統川柳と言うか、番傘系ではその後「本格川柳」と言っているそうだが、それを確立して行く道程では、その狂句臭を徹底的に脱臭して行かなくてはならなかったのですヨ。一時のナチのエダヤ排斥と同様に、目がくらむくらい熱狂していたんですよ。

迷亭 その功罪は、後にセンセイされるとして、とにかく、それで現在の川柳を、ここまで高揚させて来たんじゃないのかネ。

孝三郎 そうですよ。それは認めてやるべきでしょう。しかし、私が前に言ったダラクと言う事で、それはもう解消してしまつて、問題にしないのですか？

鞍馬 それは、まだこれからの問題で、少なくとも我々は、その

排斥派と行動を共にして来ているのですから、その舌の根の乾かぬうちに……。

迷亭 カブキ調ですよ。だが、

おおせの通り、我々はナチの残党なんだから、それについて、大口は叩けないわけだ。

孝三郎 そうかなア、私なんぞは、それにずっと疑問を持って来ていたのがねエ。

啞三昧 そうだよ。この事に關する限り、ボクらは少なくとも加害者ではないヨ。別に被害者だとは言ひ張らないが、決して下手人でない事だけは、言い切れる気がするんだがなア。

迷亭 そう言やア、この四人のうちで、その運動に参加していたと見られるのは、鞍馬サシ一人じやあないのか？



鞍馬
いや待つて下さい
私と君達
と、そんな年齢の
開きがありますか。冗談ではあり
ませんヨ。私など、古川柳の事を
書く場合、どうしても狂句を除外
する事が出来なくて、永い間ずい
ぶん困って来ていますし、それで
非難された事も度々あるのですから、その点では私こそ全く被害者の立場なのですヨ。

啞三昧 はッはッは……、みんな

ないやに弱気になってしまひましたネ。今すぐに聞せられるわけではありませんから、そう急に潔白がる事もないわけですよ。



孝三郎
それで、
この問題
は、結局
どうなの
ですか。

啞三昧 重大な問題ですよ、面白い発言も多かったのですが、まだまだ後のある問題ですから、別に無理して結論をつける事もないでしょう。後はまた他日を期する事にして、次の問題に移ってもらいましようか。

鞍馬 出典不明の古句があるのですヨ。それについて、少し話したいのですが。

啞三昧 そうそう、ずっと以前ボクが古川柳研究家の皆さんにお願いした

とむらいは山谷と聞いて親父行き

って句なんか、とうとう出典が判りませんでしたネ。

鞍馬 ええ、ずいぶん捜しましたが、判りません。また、例の

居候三杯目にはそつと出し

も出典不明なのです。しかも、これを元にしたらしい、四杯目、五杯目の句があるのですから、その句は早く存在したらしいのです。

孝三郎 岡田三面子先生以来、水木先生、その他、ずいぶん多くの研究家によって、いろいろの事が判明して来ていますのにネ。

鞍馬 私が思うのに、どうも、それは高座から伝わって来たものではないかと思うのです。

啞三昧 口から耳へ、ですか。鞍馬 そうです。はなし家が高座でシャベッタ句の、面白いのだけが、いつとなしに、伝わり残ったのではないか、と思うのです。

迷亭 そうだろうナ。そういう意味で出所の判らないものに、はかにも警句やタトエ言葉などがあるからネ。江戸時代の文化については、高座は庶民と一番密接だったんだから、その点は、もっとと研究されなければいけないんだナ。

鞍馬 ところが、それが大変なのです。第一、高座の記録という

ようなものは、ほとんどないので、すから。これまた口から耳へで、順次師匠から弟子へと語りつがれていただけなのです。近頃になって落語全集とか講談全集などという出版が目について来ましたが、それだつて名作だけで、江戸時代語られたものの全部というわけではないのですから、判らない事だつて、まだまだあるわけですよ。

啞三昧 そんな身近の事で、判らない事が多いんだから、我々の周囲には、まだ究明すべき事が多々あるわけだよネ。では、この

問題はこの辺で打ちきりにして、最後に「詩川柳」の問題を、簡単に論じてくれないか。

迷亭 驚いた司会者だナ。一番大切な問題を、一番ドンジリに、簡単にとは、何だヨ。

啞三昧 どうも……。実は、もう二時間会になるんで、テープの事もソロソロいっぱいになるし、原稿としても限度だと思つてネ。

孝三郎 そうでしょう。私も少しシャベリ疲れましたヨ。

鞍馬 私は、まだまだ平気ですが、その「詩川柳」という言葉は変ではないのですか？

啞三昧 はア、これは「川柳雑誌」の高鷺車鈍氏の新しい造語なんです、手とり早く言えば「川柳を詩として扱う一つの新運動」と見てよいんですが、ここでは、その車鈍説にこだわらず、最近の現代川柳運動というようなものについて、何か言つてほしいんだヨ。

孝三郎 もう時間が無いのなら、廻屈は言わない事にして、君の不具川柳は、その車鈍氏もほめてゐるそうじゃあないか。

啞三昧 ええ、車鈍氏の理論とボクの行動と、うまくマッチしたらしいんだが、ボクとしては過褒で、すこぶる面映ひいわけなんだ。

純主観かならずしも詩だとは、考へたくないナ。

鞍馬 俳句界などでも、ずいぶん長い間「客観主義」をとつて来て、俳句に主観の入りはじめたのは、ごく近來の事なんですヨ。

啞三昧 そうだナ。由來日本の短詩は、主観をも客観におきかえる大客観主義の文学だったんだが、最近文壇にも「私小説こそ真の文学」だなんて声があがつて「主観すなわち芸術」説が強くなつて来てるんで、詩川柳派は現代



川柳派と言つてもいいには丁度いい運動時期じゃあないのかナ。

迷亭 そういう見方もあるが知れんが、ボクは「川柳フイタショ」説を、当分は撤回しないぜ。

孝三郎 そりゃあ各人名説で、かまわないだろうけれど、この席の結論みたいなのは、出せないものかナ。

鞍馬 もう時間も余りないと思へば、それでいいのではないですか。いわゆる詩性派と我々とはまだしばらくは同調できないでしょうからネ。

啞三昧 そうですね。自分達では「前進」していると思ひ込んでる現代川柳を、ボクは前進ではなく「旋回」だと言つてゐるんだが、とにかく波調が合わない事には、同日に論じられないんだからナ。

迷亭 そうだナ。ボクだって、必ずしも五七五調を固執するものではないが、やたらに短くしたり長くする調子には、どうも賛成できないからナ。

孝三郎 まあこの四人は、当分詩性派にはなれないでしょうネ。ただし理論としては、一応勉強すべきではないですか。

啞三昧 もちろん勉強はしてますがネ。ボクは水掛論になるのを承知で、議論する気にはなれないんですよ。では、とにかく今回はこの辺で打ち切ることにしましょう。長い事すみません。お疲れさまでした。

「整理者の言葉」本座談会にはソニー・テープコーダーⅡ型を使用したが、一時間テープの

表裏に全部録音されたので、原稿作成に際し、数回それを聞かねばならず、聞けば二時間をそれに空費する結果となり、思わぬ苦心をした。然も座談には派生的発言多く、またその中に捨てがたいものも多々あったが、一応テーマに対する発言だけに

私が豆であつたら



武部 香林

朝七時に岡山県庁の屋上からミュージックサイレンが緩やかに流れてくる。
島崎藤村作詞
朝はふたたびここにあり
朝はわれ等とともにあり

の音響を防いでいると云われたが、著作する者にとって静かな環境こそは絶対的なものであり思案するに虫の声、夜鳥の声も雑音に外ならぬ。

雨垂れの音が眠りを誘う音楽のように云われるが熟睡をさまたげ作句などにも邪魔になる。私は重ねて云うが原稿生活者ならずとも、無遠慮極まる騒音でどれだけ人々が悩まされているか判らない。私の蒙つた被害の外に近くの一老人が工場の音によって関々のうちに死期を早め又赤ン坊を音から少しでも遠ざけようと玄關のたたきの上に敷物をして寝かせた

吹くのは気になった。
徳川夢声さんが書斎の窓の扉を三重装置にし厚目なカーテンで外

止め、それも本筋だけにしほつたので、当事者中にも不満の個所がある事と思う。その点当日の出席者に、ここから改めてお詫び申し上げる。なお本座談会に貴重なスペースを所く沢山お与え下さつた本誌編集部に深く感謝する。(責任者・啞三昧)

りタクシの運転手である青年が睡眠不足で運転に支障を来たしては工場に怒鳴ってゆくなどとも人間的生活ではなかった。

防音協会で作ったセレクトという耳の栓を東京から取り寄せてもらって使用してみた。

音を全然遮断してしまうのは脳に悪影響を与えるそうでそのセレクトも少し音を弱める程度のものでから当時の私は期待はずれに終って結局自分の耳で蓋をして防ぐ事が一番効果的なのを知った。蓋をする事によって漸く歩路に辿りつく。又音のする中でじっと考えを集中せねばならぬ場合などにも手とり早く蓋をする、ささえたみである。

静かな世界だけが私を救う最良の薬である事が判っているながら蝸牛のように宿替えもならずうめいて居た一昨年六月、毎日紙上に地下鉄の騒音による神経障害が因で亡くなった人の記事が載っていた。地下鉄の線路が地上へ顔を出している附近の住宅での事である。たとえ一人の命にしても都会病とか文明病とかで澄まして居られぬ問題であって、死んだものが悪く云われる事にでもなれば、先頃のお医者さんですでは無いが、病気になるな、では「そりゃ聞こえませぬ」と云わねばならぬ。電話目録交換機がなかった頃交

換機が耳にレシーバーを定着させているため、十年以上も勤務していれば、老人の勝手つんばに似た症状が起こる、ヒソヒソ話の方がよく聴こえ適期期の娘さんが姑のような耳になってしまふとは笑えない職業病である。倉敷の大阪社会問題研究所の機関誌に取り上げられていたのが現在都市の発展と文化の進むにつれて益々騒音は増大し複雑化してゆく。致し方が無いとは云え、環境衛生課など真剣に対策をたてる事は目下の急務であると思う。

大阪が自動車の警笛を無くして街を静かにする運動を全国に率先して断行したのはお手際であり、当岡山市も右へならって有難い事だ。発案は大阪府警本部長の中川さんだ。アマチュア作曲家にしてこの立案ははは笑ましい。中川さんは辞められたが更に第二第三の名案の誕生を希っている。

警笛は静まったが町も田舎もボロ車のガタガタ音が砂はこりと一緒に警笛に劣らず猛威をふるって何とも文明の姿と申せない。昼間は我慢するとしても夜中まで神風族のさばり心臓の弱いものなら、参り兼ねない音を立てる。いゝ気になってチャルメラを吹き流すおっさんも安眠を破る事夥らしく当然取締りの対照になるべきものである。チャルメラと犬の啼き

声などよろこんでいるのはラジオドラマ位のものだ。ラジオと云えば深夜放送の為隣人を寝かさないう人種があると聞く。

一体誰の罪なのか。悲しい哉日本のお互いの相剋する様に造られている。だから互いに隣人との壁を認識して少し注意すれば神経を失わせないで済むと思う。放送局も視聴者に対して注意と指導をなすべきは勿論深夜放送で他人を眠らせない問題に煩わしっていて良いものではあるまい。

近年信仰の名をもって朝夕カチカチ拍子木を叩いて傍若無人にわめくのがふえた。お蔭を頂く事のみを信条とし公然と選挙違反をして憚らず他宗をボロカスにこき下ろして強制的に信仰をすすめるのがある。私が眼の悪い事をどこからか嗅ぎ出してはうるさくやって来るのでとうとう一喝して帰した事もある。夢声さんに云わしむるならば二重窓の要らない環境に住みたいところであろうが、何しろ私などにはその二重扉さえ羨ましいほどである。

音に対する忍耐力は限りも無いのでいささか機嫌を直して、音も又愛すべきときもある事を添えてみたい。

アメリカに植物の生長に音響が役立つ事を実験発表された。同じ土質に豆を蒔くのだが静かな場所

と、いつもスポーツエンジンの聞こえる場所とに分けて蒔いた所が音のする方に生えた豆は生長率もよく花が早く開いて実もうまかついた。それが静かな方の豆は何れもすべておくれたというのだ。人間と豆とで音の与える影響が対照的である事に面白さを感じた、私が豆だったら優秀な実を沢山つけた事であろう。

乳牛に美しい音楽を聞かせたり、猛獣狩に緩やかなメロディーを流してライオンを恍惚とさせた、魚の啼き声の擬音を海中に放送して魚族を網に誘導する等人間さまもせち辛い知恵を振りしびっている。

視界なきことも不幸であるが音なき世界も又曠野をさまよう如きものであるかも知れぬ。

昨年の秋の一家について旭川尻へ汐干狩りに行った。石堤に私は一人寝ころんでいて、さまざま音がそよ風に乘って来る。

貝をついばむ鳥の群がしきりに啼き交わしているのが疲れた頭を休ませてくれる。遠く近く人間の音がす

豆秋川柳のファン

愛媛県に居る八十に近い義母へ毎月「川柳」を送っているが、最近の便りに、豆秋さんのご病気はどうかと書いてあった。驚いたばかりは、豆秋さんをどうして知っているのかと問い合わせたら、豆秋さんの句が一番好きだから、豆秋さんの名を一番最初におぼえたというのである。川柳人でなくても豆秋川柳のファンのあることを知った。豆秋氏にいただいた短冊、「むかしむかし稼げは楽になりしとか」を送って、この老ファンをよろこばせてあげた。(F)

神経をけする音音音のナイフ
眼がさめるじゃないかと犬に云うたとて 香林 同

る。そのうち水の中から甥が拾った獲物を私の傍の籠の中にざらざらと入れる。「大きな貝だなあ」と云ったが果して素晴らしい大きな貝だったので少々得意になった。砂の中をさくさくと歩いて結構汐干狩りを楽しむ事が出来た。この稿の清書を終る頃九時を知らせてサイレンが鳴り出した。お寝のみの子守歌が甘く懐かしく今日一日のページをとじるかの様に。サイレンは西で鳴っているのにいつも東からきこえる。一旦東の山につき当たったのがね返って来るのであろう。私はボツボツ寝文度にかかり乍ら一切の音より沈黙してくれといふのである。



前の魚

堀口塊人

大正六年三月の末か四月のはじめ、その当時は汽車もついていたが、その苦狭の片田舎から、大阪へ出て来て、船場の太物問屋に丁稚奉公をした。ふとものと云うのは、木綿の小巾織物のことであって、これに対し、現在のような広巾の織物は特に洋反物（ようたんもの）と称した。第一次世界大戦の景気に湧いていた頃で、福糸一梱が七百円と有史以来の高価をつけ、三品では田附將軍、北浜では松井大品、堂島では石井將軍など、相場師や成金共の全盛時代であったけれども、丁稚の私には何の関係もなかった。それより、はじめて建った中之島の大阪市庁舎のインミネーションに見とれていて、五十銭ほどはいつていた裏口をすられた方が、よほど悲しかった。

数え年十六才であった。天井と云えば、飯の上に天ぶらがのせてあるものと、驚かなかったほどの少年である。見るもの聞くものすべてが珍しかったが、生来いや

しんは、の私にとつて、たべもの、がとりわけ珍らしく、それだけは今でもありありとおぼえている。先ず安土町一丁目の、おえはん、こと、おいえさんの住んでいられるしもたや、へてつだいにやらされた。上女中、下女中、飯焚き、に丁稚二人、の五人で、おえはん一人に御幸公申上げたのであるが、この五人に対する、一日の副食物代は二銭であった。一人あてではない、漬物や調味料は別であった。いくら物価の安い頃でも嘘みたいな話であるが、そこはよくしただきで、商家にはいろいろないたきものがあつた。高野豆腐やら干瓢やら、お上からのおさがりものやら、かつをぶしやら甘露醤油などで適当にやっていたのである。毎朝、二銭でおからを買に行つた。絹ごし豆腐のおからの玉が四つあつた。これは、おかずにするためではない。椀側を軽く掃いてから、このおからをふき込んで包んだもので拭くと汁が出た。それを

手早く板に浸みこませながら拭きこむときれいに艶が出るので、それが丁稚の日課であつた。手早く拭きこまないといふのが出来るので叱られた。私は、おからを油でいためたのが好きであつたが、おかずとしてたべさせてくれなかつた。

おえはんのお孫さんのほんぼんがおとまりになると、ひるめしは、東横堀のあみ屋の鰻井であつた。値段は五十銭か八十銭の高級品であつた。私は一生に一度はあんなものをたべる身分になりたいと思つたが、たつた一人はつちでこれをたべているほんぼんを見ながら、ほんぼんに生れても、家庭的には幸福でないような気がした。

本町橋詰の南側に、夜鳴きうどん、の屋台店があつた。いつでも腹を空かせていた私は毎晩そこへ通つた。一杯のうどんであつたが、一杯の汁にうどんの玉二つ入れてもらつて十銭でたべた。常連の特典であつた。石油ランプの油煙と、

きざみ葱やうすあげの香いに、何となく郷愁をそられた。北側の角は、マルキのパン屋であつた。私はここではじめて、小豆のあん以外に、ジャム、や、クリーム、と云うもののある事を知つた。奉公人たちのあみだくじの結果は、このパンが焼芋にきまつていた。その店に、いつも島田に結つてお白粉やけのいた女の人が居た。のどに刃物で突いたらしい疵跡があつた。マルキの北隣に西洋料理の、あみ漬、があつた。大理石に、模擬西洋料理、と刻つた看板を屋根にあげていたが、フランス風の高級品を食べさず店であつた。ある時、番頭さんの言つて、エビフライ、を注文に行つたが「エビフライは品切ですかいチキンカツではどうでっしゃろ」と言われて私は返事にこまつた。チキンカツ、なるものを見た事がなかつたからである。その頃、サンキストのレモンの輸入はなかつたものか、エビフライには、柚、の二つに切つた半分が添えてあつた。そんな事ははつきりおぼえている私である。

内本町の北側に、やっこ、と云うそばやがあつた。出前持はみな江戸子で、ざるそばなどを高く積んで自転車に乗るのが得意であつた。店頭で天ぶらを揚げていたが、ころもを大きく見せる揚げ方に、感心しながら見とれた事もあつた。電車道をへだてたすじむかに、鉄砲屋と云うすし屋があつた。よほど古くからあつたものか、広沢虎造の、森の石松三十石船の中のお話に、石松が乗客にすすめたのは、本町橋の箱すし、とのことであるが、その頃からあつた店か、と思われる。しかし、船場のいとはんたちのごひきは、平野町の吉野すしであつた。めつたに我々共の口にはいるものでないとききあつて、ある時御影の御本宅で、こいさんのおさがり、をちようだいしてみたら、あまりにも淡白で、丁稚の口にはわからなかつた。

店の向いは、森吉と云う料理屋であつた。仲居さんにもなかなかべつびんがいて繁昌していた。しかし私は、この料理よりも、安土町の、ひし糸と云う仕出し屋の庖丁の方があざやかなように感じた。但し、たべたのではなく見たばかりである。備後と云う大料亭があつたが、そこは、大阪棉花と云う新しい事務所になり、それから凡町の、丸水楼がよくはやつた。大正九年の大暴落以来、船場界隈の、織維問屋の整理や倒産がつづき、その債権者会議などは、ここで開かれる場合が多かつたので「丸水楼」と云うのは、よくない話の合言葉になつていった。丸水にとつては迷惑な話であるが、それはよくはやつていたからである。

私が、洋食なるものをはじめてたべたのは、道頓堀の、アイオイ

食堂であつた。その時案内してくれた先輩は「洋食云うたらはよたべるもんや」と、ビスティと、ライスカレー、を目にもとまらぬはやさで平らげてみせたが、はじめてナイフとフォークを手にした私はどうかたづけてよいやらさっぱりわからず「洋食云うたら辛うて熱いもんや」とおもただけである。たしかそれは座摩神社の夏まつりの日であつた。一人で洋食がたべられるようになってから、最もよく行つたのは戎橋北詰の南海食堂である。そこでよく、ライスカレーをたべた。そのほかにも、ビーフシチュウやら、ロールキャベツやら、値段は三十銭均一であつても、大量に料理した独得の味をもつたうまいものがあつたけれどもライスカレーはコーヒ付の三十銭である。それに、はやくから酒の味を知つた私は、二十銭の一台瓶を傾けながらカレーの肉をたべ、あとで食事をすましてコーヒをいただいて五十銭と云うのが、びつたりと気に入つた。後年このライスカレーは松崎天民が「食通」誌上で激賞したので有名になつた。しかし、大阪の人間はカレーにソースをかけてたべている、と如何にも大阪の人間が洋食の礼儀を心得ていないように書いたけれども、南海食堂のカレーに関する限り、非常に甘く出来ていたので、ソースをたっぷりかけた方が私にはうまかつた。その頃、高級

洋食では、淀屋橋に風月堂あり、大阪駅前、一竜軒などがあつたけれども、アラスカ、はまだ建物すらなかつた。

小説「夫婦善哉」の夫婦が行つたのは千日前の、自由軒であつたと思われる。あそこはライスカレーは、飯をいっぺん油でいためてからカレーをかけ生玉子を落したものであつたが、私は、大量でえげつないのに、恐れ入って、よっぽど腹の減つた時でなければ、のれんをくぐらなかつた。

余談ではあるが、この頃の歌手や司会者が「夫婦善哉」を、め・を・と・ぜんざいと発音するのが気になつてならない。これは、フアン、を、ふ・あ・ん、と発音するよりもまだ不安である。夫婦は、みようと、である。目音でなく、妙戸、である。それに「芝居の裏の雨の夜に」と云う唄がはやつている。大阪に「芝居裏」はあつたが「芝居の裏」と呼ぶところはない。こんな調子なら今に、戎の橋を渡つて、道頓堀端をそぞろ歩きする舞妓が出て来るかもしれない。有難や有難や。

法善寺裏を東へ突き当たつたところに、滋養亭、があつた。牛鍋二十五銭、すき焼五十銭、隣客と肩がすれすれの腰掛で、それぞれに瓦斯の火で煮るのが面白かつた。内容は安くて清潔で良心的であつた。ここでは、しまは飯、むらさきは醤油、堺筋は砂糖、金魚は

熱、べつこは焼豆腐、なんばは葱、とすべて符牒であつた。「お酒のあついのん一本おくれんか」と注文すると、やけちよう一本、と叫んだ。けだし、やけちよう、

は、焼餃子であり、即ち、熱燗の呼称であつた。千日前から法善寺裏を西へ、とっかかりからちよつとはいつたところ、お多福、があつた。枝豆五銭、生ずし十銭、蟹酢十五銭、それに白雪一本十五銭であつた。こんな安い店にもかかわらず給仕人は美人がそろつていた。長谷川幸延の創作集「法善寺横丁」のモデルになつたのもその一人であつた。魚や、の梅わん、二鶴のだしまき、鶴源の天婦羅、

正井丹吾の関東煮、少しはなれて、みどりの一品料理など、大正時代のここは食通天国であつた。ところで、現在の「法善寺横丁」はまちがいであり、正しくは「法善寺裏」とか「法善寺小路」と呼ぶべきである。との説がある。そのよしあしについて、私に発言の資格はないが、これは「芝居の裏」ほど気になる名称ではあるまい。しかし、気にする人にとって

は、気になる話である。昔でも今でも、大阪で、江戸前と染めたのれんをつるしていたら、それはとるに足りない、にぎりずしである。江戸前とは、江戸の前の海でとれた魚、と云う意味で、新鮮の代名詞である。大阪

で、江戸の前の魚、をたべさされてはたまつたものではない。今でも明石では、前の魚、と称してよそから来た魚と区別している。私が、大阪ではじめて、にぎりずしなるものをたべたところは、心斎橋鰻谷の、松すし、である。ここですしをたべて、すじむかいの、しるや、白味噌の舌ざわりをたのしむのは、まさに大阪の味であつた。すし常、が、橋筋を西へはいつたところで、九尺二間といいたいが、それよりもさらに狭く、間口一周奥行八尺ほどの店を出したのが、大正の末期であらうか。私はここで、赤貝のひも、やら、何やらのゲソ、と云うものの味を知つた。これがやり出すと、いつの間にか、千日前に、すし捨が出

来、つづいて雁治郎横丁に、すし半、すし市などが軒をならべるようになった。この中で、私の気に入つたのは、すし半である。(現在のすし半を私は知らない) すし捨は店として先輩であり、すし市には、あざり汁、の名物があつたけれども、私は、すし捨のネタが好きであつた。

さりながらその頃、海老のおどりを、一番はじめに握つたのは、誰であらうか。これはまさに、にぎりずし界の文化勲章に値するものであり、大阪ならではのにぎりずしである。「えらい通ぶつた東京のお客さんがせっかく生きた海

老のうごいとんのをにぎってさしあげたんに、のみながはつといて、うごかんようになってからたべはりますと、かなしなつてきまつせ」とはその頃のある職人の述べである。

昭和十二年の二月のある夜、私は、満洲国ハルビンの中細亜ホテルの一室に居た。そこへたずねて来てくれたのは、初対面の川柳人岡部老楊氏である。この街で、やき鳥屋をやっている、とのお話であつた。

「私はこうみえても、東京の吉原の生れですがねえ、千日前のすし捨ですしを握っていた事がありますよ。」

「それでは、何故ここでも、にぎりずし屋をやらないのですか、こちらにもちよいちよいあるようですが？」

「大阪で瀬戸内のさかなを握っていたものが、よその国ではとてにぎれませんが、大阪でなかつたねえ。」

外は零下四十度の異国の夜であつた。私はこの時、千日前の角の、のれんをくぐるとすぐに鰻の大切身があり、そのよこに、たこ、いか、赤貝、とり貝、あわび、あなご、こわだ、えび、鯛などが、ならんでいる大正のよき時代を夢みした。老楊さんも亦、日本を大阪をしので、腫をつるませていたようであつた。

る。退屈な時にはそれもよか
が、私はまだ、あまりにも川柳に
忙がしいので、退屈どころではな
い。

二男のアートは、その点、この
甥と一緒に遊ぶだけの心に
余裕を持ち合せているので、考え
ようによつては私よりも幸福だと
云えよう。

アートはバイオリニストで詩人
で、常にこどもの中に溶け込んで
いる。昔の私の血をひいている子
ども好きだ。一歩はサラリーマン
で、一歩は一男一女の父、貴洲は一歩
の妻で、三人とも川柳を作る。

「孫も呑み友達になるぐらいにな
らんと面白いくとおまへんぞ」
と老妻が云う。僅にソレもそうだ
と私がうなずいた。

私の句帖にいつの間にか孫を詠
んだ句があった。

孫が去んで元の無口になる夫婦
孫の写真を何枚撮るんだ

★ A A 作家を 迎えて思う

一九六一年四月一日に、朝日会
館で、アジア・アフリカの作家会
議の講演会があった。

十七ヶ国の作家六、七十人がマ
タリと舞台に押し並んで、そのう
ちの十人余りが講演をした。その
多くが文芸作家の講演でなく、政
治的なものであった。祖国が戦乱
の甚と化している作家さへあるの
で、その方がむしろ当然のことだ
と、石川達三氏の同情的な解説が
あった。

昭と行われたが、その花束が、
中国、ソ連、日本の三代表の分が
足りなかった。あとで、それ等の
三代表にも渡すことは渡したが、
一時は何んだか変だった。これは
幹事の手落ちか、花屋の手落ち
か、その点は知らないが、中国と
ソ連と日本の代表に不足したこと
は、何か意味あるものには、誤解す
れば誤解出来ないことはないのだ
であった。

これが、社会党や、自民党の何
れかの輩であつたら、おそろしく徹
夜で騒いだことだろう。幸にし
て、どの国の作家からも何等の異
議が出なかつたようである。三国
の代表はしばらく手持無沙汰であ
つたが、少し時間が経つてから、
花束を手渡したので、とにかく事
なく済んだようである。世の中に
はこんなささいなことから誤解を
生じ、その誤解から大変な事件が
往々にして惹起するものだ。私た
ちは何事に対しても、なるべく冷
静に処する訓練が必要であること
をつくづく思わされた。

同日の五時から、網島の太閤園
で、A・A作家歓迎の夕食会が催
された。私はモンテペルグのソ
連作家の席へ案内された。そこに
は社会党の田万清臣氏夫妻が先着
されていらしたので話がはずん
だ。「先日、蔵を掃除していたら
先生の短冊が出て来ましてなア」
と云われる。

「供託に置置く人をたのまんや、
と云う句です。」

ワシがホントか知らぬが無産党
時代の西尾末広氏が供託金が無く
て質を置いたという新聞記事によ
つて生れた句だ。

「夢居ですよ」と田万氏が云われ
る。或はそうかも知れない。

ここではソ連の団長のガビット
・ムスレボフ氏を知った。
氏はカザフ共和国の作家で劇作
家。カザフスタン作家同盟運営委
員会議長、諷刺雑誌「アラ」の
編集長、ソビエト最高会議議員、
ソビエト作家同盟理事であつた。
ロシア語は遠うの昔に忘れている
ので、大いに胸襟を開いて語る訳
にいかかつた。

今一つ、ソ連のデビューが設け
られていたが、その席から天理大
学のロシア語科の松村四郎教授が
イリーナ・リボーソ女史を私の席
に伴つて来て紹介された。

女史はソ連作家同盟委員。モス
クワ大学助教授。ソ連作家同盟外
国連絡委員会勤務、現代日本文学
研究家で樋口一葉、森鷗外、小林
多喜二、其他の翻訳があり、日本
語が話せたので非常にユカイだつ
た。

こんなことを書くとき、僕が急に
共産主義者にもなったように誤
解する人があるかも知れぬが、私
としては遠くやつて来た異国作家
に親しみをもち歓迎したのに過ぎ
ない。私もかなり疲れていたの
で、アフリカの黒人や、インドの
作家たちとは親しく握手する機会
を持たなかつた。又の日に譲りた
いと思つている。(饒舌の4B②)

★巻末には「全国主要川柳雑誌一
覧」が掲げられてある。

★昭和廿七年八月廿日発行。定価
四〇〇円。A六版四〇三頁。発行
所松本市大名町七十一の川柳
社。

★編者はしなの川柳社の主宰者。
大変な努力である。句の良否は別
として今までにこれだけ多数の作
家の自選句集は出ていないので、
一応目をとおす価値はあろう。

大 橋

山根 景人 編

★本書は勝谷山川児の遺稿句集
で、その一週忌に際し、未亡人勝
谷光子さんが上梓されたもの。

★本書の序は藤生諸郎氏が筆をと
っている。

★巻頭には故人の近影と三葉の短
冊が掲げられてある。

★句は昭和九年から昭和三十四年
までのものを年代順に掲載されて
いる。

★編者景人氏のあとがきによる
と、

山川児遺稿句集を編んで、追慕の
しるしにしたいという気持は、彼
の没後、光子未亡人の胸底にきう
然と湧いていたようである。そし
て又柳人仲間でも、誰も等しく同
じ思いを持っていたようであつた
が、いざ作品の蒐集となると、二
十五年に渉る故人の川柳生活から
生み出されたものだけに、編集は
仲々容易な業ではなかつた。(以下)

★昭和三十五年九月十日発行。非
売品。B6版一〇四頁。発行者、
勝谷光子。編集人、山根景人。
★勝谷山川児氏は路郎門の逸材、
山陰川柳界の雄。島根新聞柳壇選
者。

慈 雨

(前田義久著)

★本書には山上千太郎氏の序があ
る。

★句は昭和四年から昭和三十年ま
でのものが採録されている。

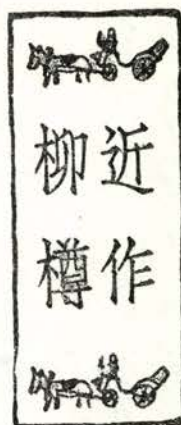
★昭和三十年十二月二十日発行。
非売品。B6版一六六頁。発行者
石川県河北郡津幡町興津、前田義
久。

★著者は農人で生活を詠う多作
家。多年全国の柳誌でその名が知
られている。本名義久の外に義風
の号を用いている。北国文芸賞の
保持者。

すばらしい 着心地

蝶 矢 シャツ





麻生路郎選
北川春巢選

ほんとうの僕をみつめる深夜動 熊本市 田口 麦彦
おとこみなけだものとみた五十年 同
春斗もいまがヤマ場のビラの数 同
健全な職場とトルコ嬢募集 同
労組の幹部としての隠し芸 同
一難また一難入学金の高 同
ゴムバンドの音もパチンと開店日 同
話し合う広場を意地と意地が避け 宇都市 平田 実男
ラッシュアワー家畜車の牛う うしろめ 同
葬儀屋へ月賦で払う不肖の子 同
引越の手伝いこんなものと思え ささ 同
貧乏の味あかぎれへしみわたり 同
お茶漬の味カローリを忘れさせ 同
あきらめてちようだ ちよう 水くさい ナ四市 堀 風船堂
かりるわけ女にみつくとはいえず 同

しわくちやですんまへん なす 酢 にる 同
紙コップと一本渡す点呼とる 同
お母ちゃんの悲鳴で鼠の方あわて 同
家出さがすビラへ夕陽の霞町 大坂市 木村 草々
動物園食しきながら平和な日 同
焼そばの腹でぶらつく新世界 同
寺町にピアノが鳴って日曜日 同
おむつ干す静木津川朝になり 同
補聴器へ昔ながらの雨の音 京都市 大久保 和三郎
なんやもう明けているぜと牌を ささ 同
医者 のスト 二句
出来るなら病へストがして見たし 同
葬儀屋がストをせぬのをせめて と 同
腰低く呼んで人事課左遷する 笠岡市 高木 桃里
薄水の中で花屋の花が咲き 同
参観日母は着物も声も変え 同
牛乳の値上げへ牧草時き添える 同
掌の皮をけすり農夫のひるやすみ 青原市 杉原 愛鳩
床の間の三味へ末座はジャズに 音 同
初任給なんぼか靴がよく光り 同
卒業へのばしますかと散髪屋 同

大阪の思い出

火の玉の話

酒井ひか平



私の主人、K商店の大旦那は、それこそ、昔の船場、島の内の大旦那の姿をほんとうに見るような、立派な格好の素晴らしい顔の、大よきな気質の大旦那であつた。その顔は能面の翁の白髭を取つたのとそっくりの顔であつた。その旦那が戦時中、排英運動と云うのが起こつた時、在野軍人道仁支部の副会長をして居られ(三十七聯隊除隊の時は一等卒であつたそう)何かの都合で支部長に代わり壇上に立たれた時、心臓まひで卒倒、十日程寝付いて亡くなられた。K商店本家は申し上げた通り絶え、今亦分家の旦那がとくなられては若御寮人さんだけが血縁となる。その若御寮が(養子取り)腸ガンで半年も病まれて亡くなられる時(お腹はタヌキの腹のようであつた)意識は死の一瞬まで正確であつたが、私は母の悲痛な悲しみとは別に店に居た。大戸を下ろして居たが、その戸が表からたたかれ、私が飛び出すと、キリハト教会(島の内)横の



山越銀金店のおばさん(当時四十八、九)が「今お宅の土蔵の上から火の玉が飛びましたで」と云う、銭湯帰えりに娘さんと一緒に見たもので嘘いつわりは無いと念を押された。火の玉が出たとすれば若御寮さんの魂である筈その人は未だものを云って居るのだ(其処のところは今以って判らない)奥の間からお念仏が聞え出したのはそれから一時間も二時間も経ってからであつたろう。

私は忙しい取込みの中でも火の玉のコトが頭について放れなかった。然し誰に云う事も出来ぬ儘につい日が経ってしまったが、人の口に戸が立てられぬの道理、山越さんの話が噂になったが、特高課刑事某氏が戦時中での外のコトを云うと叱りに来た。

今その附近の面影なんて何も残って居ないが、昭和初期から戦争で焼けるまでの大阪の姿の幾分か

車

福壽司

心斎橋筋大丸前
電話 三三四四番

福壽司

心齊橋筋大丸前

電話 27 三三四四番



余暇時代らう月給取のスト

同

お見知りをお願いのれんを出て忘れ

同

学校でならわぬ事は良く覚え

小谷 仙山

平和とは城の修理で客を呼び

同

昔の事云うて小言の長い事

同

参観は母ちゃん来て、バアちゃん子

護川 梢月

恋人が死にキリストもやめちまい

同

義理で来て葬式しきびの数かぞえ

同

入院の申込みまでコネが要り

板倉天悟空

インスタントを買わぬ母の味自慢

同

人間どもその日そのダンブが通る

同

威勢よく文鳥ステップ踏んで春

杉本 一鶴

南海電車に巻き込まれて二才の甥近く

二句

払えども払えどイメージ笑いかけ

同

お通夜へ行けぬ伯父ちゃんかにしや

同

市場で食子先生の訪問を受く

木下 一休

ひっかけた冷やをうどんで温める

同

坪万の敷地へ小便して帰る

同

ダンブカー今日も冷たい記事に

木村 涼人

お言葉に甘えて酔うて嫌われる

同

人権を尊重されて麦を食い

同

砂に寝て砂丘と空と俺一人

鈴木村諷子

別府地獄めぐり

同

極楽のついで地獄もめぐって来

同

高崎山

団体を見に猿の群寄ってくる

同

知恩院大遠忌にて

一句

十万へ驚張りもよう啼かず

河原みのる

フト俺が俺のシャレコウベ触って見

同

勧誘をト呆けて去なす日向ぼこ

同

男手が欲しい母子寮雨がもり

藤原 君子

親分はアリバイがあるなぐりこみ

同

この駅も美人が乗らず旅つかれ

北山 越山

家中がバトンタッチで風邪を引き

同

冬ごもりじつと堪えてるツボミ

稲森けい女

国鉄も冬將軍になやまされ

同

先生も私立すすめる親を呼び

吉田 俊和

値上げムード手盛り可決と拍手

同

鉢伏に立てば淡路は手が届き

半田 夏生

コマ劇場にて

川柳雑誌社特製

書きよい 美しい

投句用 柳 箋

一冊(五〇枚綴) 三〇円
送料(一冊分) 八円

は私の頭の中に懐しく残っている。

近畿の春

今西生 釐

俗っぽい言葉だが「暑さ寒さも彼岸から」と言う言葉がある通り近畿では春の彼岸前後から桜が咲き初める。キャバレーも造花の桜を飾りたてて郊外に出ようとするお客の足どめにやつきになる。バス、の転落事故も三面記事にぎあわす。何となく世の中が騒々しくなり私等の心も浮足を立てられて終う。

大体私は名所の桜よりも農家に一株植えた桜の方が好きだ。一帯名所の桜を俗っぽいと考えるのは私だけだろうか。これはこれは花の吉野山ではなく、これはこれは花の吉野山ではなく、これは花の方がこれはこれはとおどろく様なことをやってのける人間に原因があるのではなからうか。とは云うもののやはり同業者組合の総会やら親睦会等が重り合って仲々一



安い管コマ上段で顔見え

同

削られた予算へ天災遠慮せず

井上 旭峯

女の目涙を流すだけのこと

同

地下鉄の釜金魚屋の荷と向い

羽根伸太郎

地階から出口達えた連れが出来

同

向い同士電車の中の別の顔

山田 蛙水

白酒へほんのり染まる母と娘と

同

遊んでるくせにせわしい走り書

嶋野ひろし

酒臭い湯冷ましで飲む胃の薬

同

辞表手に若さは上へたてつく気

竹田 青園

きかれたら知らぬが勉強勉強

同

有難や信心の銭でビルを建て

大内 尉介

流感に泥縄政治追っつけず

同

毒舌を吐くとは見えぬ紅の色

坂上山椒坊

新妻の荷でアパートせまく住み

同

旅たのし子供のように雪も食べ

山内 静水

一口食えずその上血まで売り

同

宝石展示会にて 一句

見るだけは見とく一生食える玉

三井 酔夢

故郷を捨てた男に春おほろ

同

休日を献上晩酌追加する

伊丹柳瓢子

子のせがむ品は晩酌で買えるのに

同

鼻孔に手をかざし呼吸してる生

佐伯 九紫

九度よりも七度三分が気にかかり

同

とほしきシルエットも春たけなわ

吉田 博一

金権に屈した化粧か逢引の

同

長閑さに茶店は釣を出し忘れ

神野 素人

我が家は仕合わせ養老院へ餅送る

同

日曜の大工にストか釘曲り

盛 竜蔵

入学の喜び服と袴から

同

給料を云わぬ就職してデモリ

大垣たもつ

父の代までで家紋は忘れられ

同

朗報へ聞える方の耳をだし

出原 真奇

塩砥めたことも話して酒の父

同

しばらくは陽炎の中で憩う幸

渡辺 乱坊

恋をしてコトバにいのちある知り

同

下た手から言えば浅智恵つけあ

宮政 周防

言葉一つでよろめく顔の老いた歳

同

停電で夫婦喧嘩に間が入り

並木東田楼

春の陽がいっぱいそこの家が建ち

狄守 和穂

年頃は美しきかな笑い声

近藤 昭夫

宣伝車造花をつけて花に呼ぶ

川口 弘村

家団らの行楽と云うわけにも行かず、結局俗っぽい桜の名所へ遊覧バスで揺られて行くのが落だ。その内では私は京都の桜が好きだ小原女の手甲紺がすり姿と桜の組合せ、祇園の夜桜と舞妓のだらり帯、御室の桜と虚無僧の尺八、古典趣味と笑われるかも知れないが、一番芸のないのは花の下でやる炭盆節、しかしこれも今年はある。桜があたや有難やと有難や節がとって変わるかも知れない。こんな中から中座して裏道のひっそりした茶店等で一升瓶に無造作に桜を挿してあるのなどを見つけると、やはり桜は良いものだと思ふ。然し帰りのバスの中で鼻の穴を拭いてころうじろ。煙突のようには両方共はこりて真黒、拭かない方が幻滅の悲哀を感ぜずに済むかも知れない。

ヒゲそり後に...

●美容衛生剤G11
●アラントイン
●水溶性ラノリン

配合

男性

200g

アストリンゼン



真心が病室飾る千羽鶴 岡山市
死に水はとらず形見わけだけは 高知県

行吉 輝次

倍增の支出が春をなやませる 笠岡市

谷本鈍愚坊

入院へ罷もきちんと刺って行き 宇部市

鎮浪 翠月

母乳ばかりで育てましたとき 大阪市

西本 保夫

日日好日さやかな倅でよし 愛媛県

鳥井 川鳥

休診日盲腸でないかと案じ出し 兵庫県

斉藤たけお

建国の記念日もない国にされ 笠岡市

松本 忠三

花嫁へ針さす如き女の目 守口市

樋口 一峯

求人難それでも失保貰いに来 大阪市

北村弥次呂

日曜の財布をねらう春日和 松江市

岡崎 雪美

職安窓口

ガム噛んでええとこないな求職者 大阪市

本村 文福

夢にまで見た故郷へおちつけず 愛媛県

片山 光福

総入歯はずして孫をこわがらせ 和泉市

末田 晃康

指えくほマダムは気味の悪いしな 泉大津市

高津 紡毛

牛ながく鳴いて平和な村の春 七尾市

松高 秀峰

早仕舞大工三役観るテレビ 神戸市

吉田 隆史

昇給も昇格もない椅子の味 河内長野市

森本黒天子

くだらないと思う唄ほど流行り 山形県

菊地 白葩

縄飛びに足がからんだわらべ唄 松江市
鯉のぼり目刺のように風に浮き 宮崎県

岡崎 祥月

パチンコで儲けた金で按摩をし 大洲市

尾花 群雀

お隣りに附合いのよう風邪を引き 松山市

沖原 光雄

ガラ空きの湯桶は尻にまで敷かれ 大塚町

見本 泉洋

思い出し笑い歩道の影をふみ 枚方市

福山えく果

悩むことももうなくなった差押え 堺市

山口 拳児

父ちゃんはまだか子供は熱を出し 大阪府

中岸 雄水

一張羅の声で電話がはかどらず 岡山県

鳥取 周甫

島育ち余生は島で釣に生き 愛媛県

村上 竹生

お人形は押し潰されたまま寝てる 堺市

山本 素郎

飼ひひわに深い春眠さまされる 羽咋市

三宅 ろ亭

ゆうずうがきかぬ聴診器が恐い 大阪市

木村 太郎

養子つていいもんだよと養子なり 岡山県

安藤 祥男

妻として夫のための見栄もいり 大阪府

橋本 裕邦

出戻りの気楽さひとり年を取り 小松市

月田北海坊

炭火突く辯姑のカンにふれ 金沢市

山本 木象

雪焼けの顔が土産のスキーヤー 茨木市

高木繁太郎

ハクシヨンに鶏舎のひよこ黙り込み 大阪市

中江ゆたか

ウインクの嬉しい若さ持ち合せ 宇部市

神田 豊年

味のコーヒ

モダン 川柳

心斎橋大丸北の辻東へ

御 門

TEL 27 6684

御集会には階上御利用下さい



・川維ジャーナル・

川柳の鬼

四月句会に出席した

— 山本葉光氏

川柳阿倍野支部の山本葉光氏が
歩行さえできぬ不自由な柳人である
ことは誰一人知らぬ人はいない
が、四月の本社句会に背負われて
出席された。

げっそりやせておられた。兼・
席題を出句すると、ぐったりとな
ったように横になり、寝て披露に
耳をかたむけておられた。

川柳愛もここまでくると鬼気迫
るものがあり、葉光氏を迎えた四
月句会是一个の逸話をのこしたよ
うである。一日も早くご健康にな
るよう祈ってやまない。

戸田古方



俊江

そこから幸せが生れるとすれば、客観詩である川柳こそは幸福



コケヨ
便箋



手術台のつてもけちなこと
思う

奥様はお暇指環の掃除する

お元気で 大陸

川柳人



東野 大八

このは突然のように一通の封書が舞い込んだ。九州の出口夢詩朗さんからである。開けてみると挨拶状に、経文みたいな黄色い五ツ折の厚紙が出てきた。みると元満洲在住川柳家名簿と書いてある。それを開いてみて私は思わず深いため息とともに、「ああ、これは懐しい」と口に出してつぶやいてしまった。

ずらりと並んだ大陸の柳人百十四人。格別の縁故につながった人から、師匠格の大先輩、そして兄分、友人、後輩、さらには名前だけだが、耳なじみ、柳誌づきあいの方々など、水が乾いた砂にしみこむような具合に私の胸をじつくりとひたしていった。

終戦直後、私が内地へ敗戦の身を運びこんできたとき、まっすぐ私の胸へまともに還ってきたのは川柳だった。奈良の深井凡々さんから送られてきた「むつみ」。私はこの柳誌の一冊に正直なところ涙さえこぼした。一句一文、私はその「むつみ」がくるたびにむさぼり読み、そして一句一文を書き

んな幸せな私だったが、ムビにも忘れ得ようとして忘れ難いのはやはり大陸の川柳会とその柳人の人たちの姿、風格、作品だった。

お手紙を頂いた出口夢詩朗さんは大連番傘の総師で、撫順の安武仙涙さんの家ではじめてお会いした。全部で二十句ほどのものを平拔、五客、三光と全部入選されたのにはおどろいたが、その横顔をながめながらこの人はよほど骨のずいまで川柳人の好きな人だな、と思った。景谷川里遊さんも撫順で郵便局長さんだったが、ひょうひょうたるお人柄が印象に残っている。撫順での挨拶の句の巧者は山下柳さんだった。

打ちあけて話す相手も無一文

という引揚げ後の一句などはこの人ならではのズバリの名句だ。まだここには福井天弓という川柳の天才までいた。感傷派の仙涙さんはご本業のお菓子屋さんだけに、甘さの手加減も堂に入っていたが、天弓さんは黄土層の雑草みたいな独特な風味があったのも、撫順という大地に取り組んでいた人だからだろう。この二一統の機関誌は「琥珀」。

奉天には石原青竜刀さんがいて、私の勤めていた社の客員でもある人なので、毎日顔を合わせたもとはといえばこの人が私の柳眼を一段と開いてくれた人だ。今でこそ人川柳だが、当時は一味棲雑記などで大いに偉勢のいい戦争

の二句は人間の臭さのやや濃いもの、

三十三間堂宙に浮かべた春霞

鶏のとさか真赤な霜の庭は反対に俳句との区別もしにくい、自然風詠のあふれる感じの句であります。

寒風に船の七輪火をこぼしおいしかった西瓜の種を拾ったとき

はその中間を行くもの、いわば「人」と「天」と「地」と一語でいいあらわしてもみられはせぬかと思ってみました。

沢山の句の中にはこう簡単に割り切りにくいものもあるにはありますが、ここでは説明のしやすそうなものをよったわけでありまして、しかし、六句に通じていることは自分を忘れてしまっていないこと、客観性を失っていないということです。

私にも経験のあることですが、手術台にのせられて、どうなるとも思いましたし、一つ切り損なわれたらと心配しました。お医者さんにまかし切ったような、甘いようこびを麻醉の不思議な魅力といっしょに感じました。句主は一瞬、切られている自分からはなれて、それをながめているのです。その「けち」な思いを自嘲するだけのゆとりをみつけ出しているのです。

「指輪を掃除」する奥様は句主自らか、どうかはとにかくとして、ここにも、たいくつなほどみちたりの女の何かをはっきりと見せてくれているのであります。自らとすれば虚栄に対する反省もありまじょうし、他とすれば、軽いシットに似たものも感ぜられます。

あえて、句の甲乙はつけませんが、柳歴はとにかく、奇をてらわぬ淡々とした表現の中に穿ち以上の敬意をほうらうべきものを見るのです。

こんどは壽由さんと仙山さんですが、この「三十三間堂」の句は私の好みにもよるのかしれません、が、実にうまいと思いましたが、「宙に浮かべた」とはさすがです。大和絵のものであり、三十三間堂の堂の長さとして以上にたなびく春霞の長さまではっきりと見えてきます。

さてこの句が川柳かどうか。俳句といってもいい句で、川柳人が作ったから川柳ともいえそうです。しかし、この「宙に浮かべた」といい方は多分に川柳的であります。用語が口語であることがまず見えますが、その口語の中からは、大和絵というより、浮世絵になり、淡い引霞みはとにかくとして、画面の天地には原色に近い紺色や、紅色もちらりとぞいてくるではありませんか、お堂も無人の堂ではなく、通し矢の見物人もちらほら見えていなくてはなりません。かすかではあっても人間

完達の論文などを書きまくって、たものだ。その青竜刀派の大連「春泥」一門の向うを張って、木曾町にはタバコ御商の宇和川木耳さんが一城の主として番傘派を守って「満洲野」を出していた。西野光陽さんが一番番頭で、この人は句会のピカ一、柳詰一冊をひろげてたちまち同想異曲の句材で三光を窃取するに巧みなチョビビグの写真屋さんだった。木耳さんは

恋・無情五月の花はたれ下り

なんて句をものして、今でいう「小説新潮」式句を作って、番傘オンリー番傘大明神だった。

更に三国志ではないがもう一人奉天にウルサイのがいた。職業紹介所長の井口呑湖さんで、これは東京の「川柳クラブ」同人。この人がアンチ番傘、アンチ大連青泥派で、若い私や駒沢銀舟、川本順車などという当時のかけ出し川柳黒連隊をカゲながらおだてて鶴崎一井を使者に、奉天番傘同人総辞退を敢行させたりした。若い人がオタてるのが上手な人だった。

奉天のこんな動きで、ついに「大陸川柳」が生れ発刊の会を催した。これには大連の小林若八、野田鯉魚、渡辺雨明というウルサ方が大連から乗り込んできた。いふなれば青泥九十九号の肩替りがこの「川柳大陸」だったわけが大連の「春柳」の一部も参加した。

やがて私は奉天から新京に移っ

た。ここにも大御所、大先輩がツヨツと句より柳論放語、奇癖をひるがえしていた。筆頭は大島瀧明さんだった。土建会館の階上でお会いしたが、画家の野村勝美さんや同じく栗山博さんがその場において、もったいないような名画の色紙をもらった。小池蛇太郎という変わった名の柳人が酒によって

「瀧明の川柳は標語川柳だ」と

と吉野町のみ屋でゴキ下ろしていたのを覚えていて、失敬な人だとおぼえてはきいていて、然さんがあとで「あれはあの人の悪いくせだが根は善人だ」と私をなぐさめた。電々会社の近くに生必会社がありここに上倉泥柳というゴツケツがいた。大兵肥満の重役タイプでダイヤ街ではカーさんで有名だが、果して彼に詩の感覚があるのだろうか、といったのが同じ会社にいた堀一雄だった。

ところで新京といえは忘れられない大人物？に大井正太さんがいた。新新兵衛法律事務所なる館の大きなソファにでんと坐って、

天井がぬけるほど大きな声で「江橋はナシの花ざかり、ウハッハッ」と笑った声が今でもコマクに残っている。風貌もお十夜孫兵衛みたいで、青竜刀単独句集「通」の中に

でてくる一句

大兵の東軍流はカタキ持ち

という句はこの人がモデルかいないあ、と考えたりした。

こうしたおレキレキで「東軍川

柳」という気宇壮大な柳誌が出た。柳が名前に反して黄表紙のヤセタ柳誌が出来上った。勸進帳みたいな設立趣旨がビラヒラと手の内ではひらいたが、どたからぞかし蔭介石氏にもご披露するほどの立派なものかと思つたのがそんなせんか紙並みのにはがっかりした。たしか二号で潰れたはず。

こうした三都、四都物語をよそに遼陽というタチバナ大隊長が古戦場の地に図書館として深井さん

がいられた晩、青葉町のモロッコ

というカフェで大変ご馳走にな

つた。そのとき高橋月南さんとい

られ、若八師匠の古淡古風貌も眼

に残っている。

鶴沢騷子、井上柳下、海老水

母、小田二十景、奥原雨人、片岡

四迷子、河村日満、毛塚里香、佐

藤木賊、杉田半生、高木満山、

谷克美、名藤柳葉、滑川八十八、

西村佳唱、野村勝美、浜地司空、

福原南々子、松村三柳子、万木箱

人、松浦舞古、森崎仏心、森口一

風、矢野錦風などのみなさんは、

大陸風柳陣の快い風の中で奔放

の多作佳吟を流のように吹きあげ

られた人たちだ。張出し横綱に蒙

古の岩崎柳路、山崎小鮎の二人

をしみじみとしのびながら……

なお終りに柳路さんと別に物故

された宮武如蛙、安井八翠坊、松

尾小女郎、湯木白庵の太久保彦左

の先輩諸氏に新たな黙禱をささ

げたい。(三月二十一日お彼岸の

中日記)

がいます。「宙に浮べる」と文語としたとき「宙に浮く」という組合せはあまりかわりすぎて落ちつきを失います。やはり口語でなくてはなりません。

「鶏のとさか」と「霜の庭」とのコントラストはこれまた絵の世界のものであります。かすかなが

ら、白の一刷毛はいたその一隅に赤い鶏のとさか、いい見つけどころでありましょう。象徴的でもあり、この方はよほど俳句的だとい

えましよう。しかし、これとても庭という人間の営みがある中から、にじみ出ています。

人間の匂いの濃いのと、淡いのとに、はさまれた「船の七輪」と

「西瓜の種」ははるかに人の慾望の度合がはっきりと出てきまし

て、その扱われている舞台がたくみに組合わされています。「西瓜

の種」の下五「西瓜の種を拾った」を「西瓜の種も拾った」と

とふと読み直してみましたが、そうすれば余計に面白くなってくるの

ではないかと思ひました。だがこのままの「拾った」にはそれとは

またちがった大地がでてくるのです。そして、人と自然のむすび

きが、よりはっきりと見られ、

「とっておき」にだって「種」と

いう以上当然大地に結びつくので

すが、あえてそうしなくとも、も

っと素朴な素直な美しさがあるよ

うに思えるのでした。

又「寒風の船」はぶつつけに寒

さを肌感じますし、それと七

輪、しかもそのこぼれた炭火が、寒い水に消えてゆく音まできえてきます。

ぶつつけに句を出して、ぶつつけに乃木さんが、親鸞聖人が出

て、さらに孔子、老子まで飛び出して、やっと句稿らしきものにも

どりしました。

そして、「天」「地」「人」と

いふは秀作三句の評みたいですが、こうしてならべていますと、

川柳自身が自然と人生と、それをどう交ぜるべきか、「天」「人」と

「地」となるというのです。川柳の中といえますが、私はそうい

うことを書き上げながら考えてみることができました。

慾望を根にもつのが、生きとし

生けるものみな宿命なのでしょ

う。その中心の慾望をつむ凡人

特有の気の弱さを後天的に包もう

としながら、その人為的な強さの

カラを破って、ひよこひよこ顔を

見せるおもしろさ、又、強さ、強

さでとりまいてみても、所詮、勝

てない本性に泣きながら、より以

上のものを求めていった人々の、

人間の本性との矛盾からくる面白

さ、それは人間の万花鏡でもあり

ました。之を、これ人間喜劇とも

いえるのでしよう。

柳道こそは、その各人のもつそ

の特性を自然にみつけ出すことが

出来るものであり、より幸福な人

生に何かのプラスを自分の気のつ

かないうちに身につけていって

るのではないでしようか。



玉藻の前

富士野鞍馬

エレキテル玉藻の前の後に出来
(タル三九)

これは文化四年、春駒という人の作であるが、エレキテルは電気で、玉藻の前の狐の妖力よりも後に出来たのであらうと洒落ている。

この玉藻の前というのは、鳥羽帝の侍女で、謡曲「殺生石」に

「そもそもこの玉藻の前と申すは、出生出世定まらずしていくの誰とも白雲の、上人たりし身なりしに、然れば紅色を事とし、容顔美麗なりしかば、帝の歡慮浅からず。」

とあるように、前は太古中国周の幽王の寵姫褒姒となつて、王をたらし、わが国へ渡つて来て、玉藻の前となつて、鳥羽帝の寵愛をうけたという、金毛九尾の古狐であつた。と伝説になつてゐる。

古渡りの官女といふは玉藻なり
(拾四)

大内へほうじ直したものがくる
(万安七)

笑いつぶして日本へ渡るなり
(八安九)

幽王のしたあとをする鳥羽の院
(末二)

また一説には、褒姒に化ける前に、印度で華陽夫人と化けて、班足太子を悩ませた。

と伝えられ、それで、三国を股にかけた妖狐であるといわれている。

天竺の唐のと玉藻なれたもの
(タル一、拾四)

唐天竺は尻の毛も数えられ
(末四)

三国へ男もならぬまたぎよう
(タル六一)

三韓を玉藻の前はすぐ通る
(八四)

遠ッ走りをする奴は玉藻なり
(二三)

一国に三本あての尻毛なり
(八四〇)

三国を廻わしにとつた畜生め
(八三八)

女一定三国を騒がせる
(八四〇)

毛深いに三国ながら気がつかず
(八三八)

三国の王をはめたも一つ穴
(八九〇)

三国にすごい一狐の富士額
(八八八)

等々と、印度、中国、日本と渡つて来たことを、川柳に詠まれている。そしてまた、帝の御寵愛を、

三国一の化けものは緋の袴
(タル四三)

爪立って歩く官女を御寵愛
(八一〇)

狐とは夢にも知らぬ鳥羽の御所
(八一〇)

毛深いと君にもしろし召されたり
(万宝十一)

玉体によく金毛の怪我もなし
(タル八一)

鳥羽の院挟つてみても気がつかず
(末三)

仏法にかけては玉藻きつい事
(万安六)

さつさと玉藻唐本読んでい
(八安七)

などと詠まれている。

と作られている。

ところがある夜、清涼殿で管絃の催しのあつたとき、一陣の風に灯が消えてまっくら闇になった。その時、玉藻の前から怪しい光りを発して、まるで月光の照すようであつた。といわれ、

狐火で清涼殿をかがやかせ
(万明五)

暗夜に燈し火をえた鳥羽の院
(八安六)

と作られている。

その夜から、帝は御悩(おのう)とならせたもうと謡曲にある。

闇にアヤあつて晩から御悩なり
(万安六)

ヒソヒソと玉藻の前を不審がり
(タル初)

天竺浪人をなめて御悩なり
(拾四)

恐ろしい御悩は玉の汗を召し
(タル一六)

鳥羽殿をか玉どのが摘むとこ
(八四二)

鳥の羽根すでに狐が喰ふところ
(八一二)

もちつとて狐王子を孕むところ
(八一八)

川柳もそれを詠んでいる。

そこで、陰陽師安倍泰成に、御悩の原因を占わせ、祈禱をさせた。泰成は、玉藻の前

前に目をつけて、御幣を持たせた。

御幣をば迷惑そうに官女もち
(万安九)

玉の汗かいて御幣をもっている
(八)

コンの卦が出たで泰成腕を組み
(タル五六)

コンの卦が出ると狐のわざと知れ
(八一二)

そうしてついに化けの皮は剥がされた。

九本ある尻毛日本でおさへられ
(タル七六)

十二単は恐ろしい化けの皮
(傍五)

露顯したと覺つた玉藻の前の妖狐は、尻をひつて逃げ出したといわれている。

祈られて玉藻の前はおならをし
(拾四)

最後尻を放ると泰成祈りやめ
(タル三二)

三国へ尻を一つづつ放つて逃げ
(八五六)

それで、帝の御悩は治つたのである。

玉の点とつたら御悩平癒なり
(タル一七)

その妖狐は、下野那須野をさして、飛んで逃げた。

日本へはもうコンコンと御所を逃げ
(タル四三)

恐ろしき御所手だらけにして
逃げる
(タル三二)

タツイクワイのクワイと下野
さして飛び(タル一四・拾四)
那須野まで十二単衣のままで
飛び
(〃一二二)

それから、この妖狐を、三
浦之介義明と上総之介広常が
勅命をうけて退治たと伝えら
れ、

勅詔に両介眉へ唾を塗り

(タル一五四)

三国一の最後尻は那須野なり

(〃五二)

両介は尻にむせながら引きし
ほり
(拾・五)

と詠まれている。

ところが、この妖狐、両介
に殺されるや、たちまち一個
の石と化し、その石が、近づ
く人畜や、鳥虫に、毒気をあ
てて取り殺したという。すな
わち「殺生石」である。

古渡りの官女も果は石となり

(拾四・タル四六)

美しい玉もとうとう石になり

(タル三四)

和らかな国で狐は堅くなり

(〃三六)

石になっても飛び鳥は落ちる
なり
(〃四五)

下野の狐石でも命とり

(〃六二)

と川柳にも詠まれている。

そこで、源翁和尚が、深草
帝の勅命によって、この殺生
石を打ちくだいて回向をし、
その危害を取りしずめた。と
伝説になっている。それにつ
いても多くの川柳がある。

大喝一声毒石を粉にくだき

(タル七八)

女能で和尚野干をぶっぴしき

(〃五三)

三国の毒を女能たたき割る

(〃一三七)

女能は石泰成は尻を割り

(〃三一)

女能で割るとは美女のおんづ
まり
(末・初)

三国で割られたあとを和尚割
り
(タル四五)

石になっても女だと和尚割り

(〃二八)

御寵愛石になってもまたわら
れ
(〃二六)

畜生め石になってもまたわら
れ
(〃四五)

女翁は一角よりも毒を消し
め
(〃六一)

石になっても割られたる畜生
め
(〃〃)

金槌の大きなのを「女能」
というのは、この源翁和尚か
ら出た名称だといわれている。
「殺生石」の遺跡は、今

もなお那須野にあって名所に
なっている。

先生と

九十分

米沢 曉明

帝塚山四丁目目で電車を降りる
と、五年前に見覚えのある赤いボ
ストが下車駅の間違いでなかった
事を教えてくれる。それから右へ
左へ——やっと目印の酒屋、空地
を目あてに、静閑な川柳雑誌社へ
辿りついた。

ベルに迎ええられた。先生、「米
沢です。時間がないのです。」レ
インコートを脱いで室にはいる
と、炬燵にむかって何か執筆なさ
っていた路郎先生が斜々上目でニ
ッコリ迎えて下さる。簡単に挨拶
をして坐ると、

「子供さんは——」と入試のこと
を訊かれる。愚息は一昨日始発で
受験に上阪、私は一昨日の夜行で
上阪。同じ大阪の土地にいながら
行動は別、仲は受験中、私は今、
社に坐している。しかも仲とは全
く無縁の就職、生徒引卒の旅で、
しばらくを利用しての面会であ
る。

開口一番仲のことを訊かれた。
先生の人商味に触れた時の嬉し
さ、現実と体験で割り切る父とし
ての理想と、夢多き若人の理想の
ズレ——これが入試にも表われて
語は四方山、昔の頭で、今の若人
を考へてはならぬ——どうやら話
の結論は出たらしい。

人間、否父としての路郎先生の
体験を聞かしていただいたり、経
済通としての所得倍増論議に話が
飛んだり、四国路への静かな旅の
構想を洩れ聞いたり、ビールを御
馳走になりながら奥さんの飛行機
旅行談義に話が変わる。それは、汽
車よりも、船よりも、飛行機旅行
なら落ちれば、全くの瞬間の思い
だからとの飛行機旅行賛成論、
「その時は船も一しよですよ」と
言ったが、「船は五分……十分沈む
までに、いやな思いをせねばなら
ない」とおっ
しやる。

予定時間が
来たのだが立
てない。人間
横丁東野大八
論(愛蔵出身)
が出るかと思
うと、路郎先
生と奥様の事
務分担の話し
それはとても

正確で几帳面なものなど……
まだ一カ所用事をすまして午後
四時難波の住友銀行前で会う約束
の人がまっているので残念ながら
腰をあげる。

靴をはいて、庭に立たれた奥さ
んに、お辞儀をすると、路郎先生
が、わざわざ炬燵を出て玄関に坐
し手をついて見送って下さった。
川柳の父、否母かも知れない路
郎先生が本当に……いんぎんに見送っ
て下さった姿、そして原稿に埋ま
れて死ぬ積りだといわれた何分か
前の先生の声とを交々思い浮べつ
つ、何とも言えない尊いものを味
わいながら今来た道を逆に……ビ
ールの酔いも軽やかに快い住吉の
風に吹かれながら(三月廿七日)
作合格社を訪う機会に恵ま
れる

(大阪王太 雑誌)

ビールは
アサヒ

五月の風



一日の「メーデー」五日の「こどもの日」八日の「母の日」十日の「バード・デー」と、五月の風は生活のうたを歌う。浮かれるだけがゴールデン・ウィークではないでしょう。

メーデーの句を利用して

河村 日満

労働歌重役室の窓閉まる

日満

第二十五回メーデーのときの句です。七年前ということになります。この時はメーデー議長として、鳥取県で初めてのジグザグデモを指導して、新聞に大きく報道されました。丁度鳥取駅の屋上に立って、いよいよメーデーも終りというときのことです。只今もまだ重役で居られる田中花子（前社長田中道夫夫人）さんが、重役室の窓を細めに開けて見ておられるのと、私の顔とがばったり合いました。普段ならどちらがが会釈の一つもして居るところです。

が、メーデーの日の、しかも私が議長という立場ですから、田中重役も見ているという訳にはいかなかったのでしょうか。窓をスーと閉められたその印象は、最後の労働歌を歌う私の中で、一句となってまとめられていました。

うちの労働組合の創立が、昭和二十一年二月十一日ですから、私のメーデー参加もそのときからで、今年で十五回ということになります。が、何しろマッカーサー元帥に貰った労働組合のこととて、メーデー第一回の参加は、私は勿論、当時の組合幹部の方々も、あまり詳しい事は知らなかったように、唯労働歌を歌い続けては、あちらこちらを歩き廻ったことと、その時の議長さんが馬に乗って、参加者の私達を叱咤激励しておられたことだけが頭に残っています。そして、十五年。この間私の組

合歴も十四年というベテランとなり、今では日ノ丸自動車労働組合の専従委員長として、一二〇〇名組合員と諸に組合活動を続けており、メーデーの議長に、安保反対斗争での議長にと就任しては、議長要員という薩口もつかれていいます。でもこの委員長案外の香気坊主の上、階級意識に乏しく、未だに社会党にも入っていないというずぼら振りで、これと同じく川柳の方も組合関係、労働関係についての句はさっぱりで、特にメーデーについては、先程の一句と、次の一句があるのみで、メーデーらしいメーデーの句がありません。そこでここでの句は、川柳雑誌に掲載されている句を利用して貰って、稿を埋めることにいたしました。悪しからずお許し下さい。

メーデー

政党の祝辞拒否してデモに
入り 日満

時間の関係で、開会が遅れたときは、時たまこんなことになりました。挨拶に来ておられる人こそ、迷惑この上なしですが、いきりたっている場合と、民主主義の押しの手には、やむを得ぬところでしよう。

メーデーについて歩いた靴の減り 満年
メーデーの蛇尾はボソボソ付いてゆき 五茶
第三十二回の今年のメーデーに

も、こんな人が多いことでしよう。鳥取あたりでは特に「ついて歩く」人が目につきます。それに先頭は兎も角、後尾は狩り出された連中で占められていますので、早く終ればとの考えがいつぱいで、ゾロゾロノロノ。これでは何んのための参加かと云いたくなるんですが、拝み倒しての参加者も居るんではね。

メーデーに参加もせずバチンコ屋 水堂
メーデーをぬけてこつそり 費
参加もせぬ不逞者も居るようですが、メーデーの列からこぼれる連中も、決して少なくはありません。前二句のように、バチンコ屋は兎も角、映画に、デイトにと、切角の休み日を労働者の示威あたりに、使いたくないのでしょうか。「こつそりぬけ出す」のは、若い者に多いようです。

メーデーの日当バチンコ屋 永断
へ運び 水断
どうもバチンコ屋と縁がありますが、庶民詩川柳の場合、いた仕方のないところでしょう。さて、メーデー参加のため、日当を？と驚かれる人があるかも知れませんが、事実のようです。私等中小に属する組合には金もあり余るので、大きな組合には金もあり余るので、日当の外に映画券とか、お菓子とかを、メーデーの当日配っているのを、この目で見ておられます。後進のみかと思っております。

肝疾患・疲労・二日酔

★総合強肝剤

ウロコ印



歌田薬品

リポコール (12種の成分を配合)

20錠・50錠・100錠

ましたが、これで見ると、先進県にもあるようですね。

メーデーの余韻にひたる中ジョッキ 麦彦

ジグザグデモのあとの一杯、それも冷たいジョッキは、腸に沁みわたります。どつと押し寄せたメーデー解散の人達が、其処此処の食堂を占拠するのも、この日の情景です。

メーデー歌口の中まで土ほこり 一夜

中央あたりではきつとそうだろうと、この句味わっております。鳥取あたりでは、舗装道路を歩くのみで、こんな句を作れば誇張しすぎて、と漫にされるかも知れませんが。

メーデーへ社宅はみんな出て送り 夢路

メーデーにビルジンは小さく見え

鳥取あたりでも、メーデーの列へ眼をむく人ばかりではありません。最近では特に眼の敵のように見えていた商店街の人達までが、出てみるようになりました。まして同志ばかりである住宅街では当然のことでしょう。お互いに手を振りながらの行進は、グッとフアイトが湧きますね。こんなときの気持ちで見るビルは、勿論小さいものの感じます。

メーデーの鉢巻ストと又ちがい
この「又」の内容は深い。同じ鉢巻であり乍らも、メーデーの日の鉢巻は天下暗れて、というところですからね。それにしても阿茶さん、本当にメーデーに参加されたのでしょか。

メーデーから吊っぱなしの万国旗
いつ頃から前夜祭がやられるようになったか、一寸忘れましたが、メーデーの前夜祭は、祭らしくて好き好き。山車を出すようなメーデーをと、二十六、七年頃から提案をしています。一笑に附されておられます。示威ばかりでなく、家族中で参加出来るメーデーにしたいのです。それにはやはり氣勢をあげたり、ジグザグしたりだけでは、駄目なんです。

メーデーの布哇はレイの香に埋れ
アメリカでは殆んど祝わないと

云われておりますが、これで見ますと、ハワイでは祝われるらしい。その様子がどんなものか知りませんが、全参加者がレイに埋もれての想像は、一度その土地を踏んだ私には出来ません。

メーデーに軒の小雀巢立せり
古い近作柳樹にある句ですが、一寸変っておりますね。メーデーと小雀、労働歌を忘れさせる気持ち、五月空の青さが眼に必みるような気にさせるのも、この句の持つ魅力でしょう。

以上他人様の句ばかりを利用して、私に課せられた責を逃げました。この課題初めから苦手であった事を申添えまして終ります。メーデーに子連れが目立つ青い空
メーデー列を働く瞳がみつめ

こどもにすまぬ

こどもの日

不二田一三夫

誰よりも誰よりもこどもを愛す。これがボクの信条である。

燕は父は運んでくれぬなり
(句集私達から)

この句はぼくの少年時代の父を詠んだ句であるが、これがそのまゝ、こんど本職をすてたのでぼくに当てはまる句となったことは皮肉である。

父にしてもらえなかったことを、ぼくは父として子供らに尽くしてやってきた。しみつたた菓子子の買い方をしたぼくの少年時代だったが、こどもらには戦時中でもない自由をさせぬようにした。その代わり老後の貯金なんかビタ銭一つなく全部こどもらに注ぎ込んだ。末娘も高校を出てくれたし、やっと肩の荷がおりて、ここはぼくの極道がはじまったわけである。

「二年間、養ってくれ」と、売れもせぬ原稿を書きだしたのである。もうウチの子らは「こども」ではないが、毎年「こどもの日」には何かよろこばせてやったが、ことは何ひとつ、してやれない。

「そのかわり「父の日」は返上するよ」
「なに言うてねん、お父ちゃんのお金が売れる日まで、ウチらお嫁に行くののばしてあげる」
——黒川善吾氏のピンチヒッターで執筆。

母を語る

小西雄々々

若い頃は病氣一つせず元気だった母も齢はあらそえず、殆んど年中肩や腰が痛んだり、気候の変り目には必ず風邪を引き、しかも恢復に相当の日数を要するようである。

母は京都の生まれで、嫁ぐ前から米子に来ていたのもう五十年位になるわけだがまだ京都弁が抜けきらず、私は子供の頃から京都の話をよく聞かされて育った。暇があるとき洗濯と掃除をしているのを見るが、清潔をモットーとして「沢庵をタワシで洗うノイローゼ」と、どなたの句か忘れたが川雅誌上で読んだことがあるが、この句のように、沢庵は必ずタワシでこすらないと気がすまない質である。

文那から復員後、私はマラリヤの高熱から心臓を病み、一時は重態となったが、「必ず癒してみせる」と看護して呉れ、医師の適切な治療により一年後には全快した。あの時、不眠不休の母の慈愛溢れる看護が無かったら、今日元気な働き、川柳作句の喜びを味わうことが出来なかったかも知れない。

私の長い川柳生活も御多分に洩れずスランプがおとすれたが、常に励ましてくれたのは母であり、毎月、川柳雑誌の届くのを私以上に待ちわびるのも母である。特に印象のあった句はノートに記録し、別の機会に取出して読み直すのも楽しみの一つらしい。また川柳米子文部では柳誌「松露」を発行し、その中に誌上互選句会を行っているが、互選句を選句して、翌月発表になった句と比較している。

好きな物は寿司である。寿司が

スマートで
着心地良い



GOLDEN
O.S.K.の
紳士服

各地特約店に有り

好きだから寿司を作るのも上手で、寿司屋のものより味が良い位だ。春秋の氏神様の祭りには餅を搗いたり、赤飯をたくかわりに必ず寿司を作るが、私もたまに大阪方面に出張の際は、お土産の寿司は忘れないようにしている。

反対に嫌らいな物は肉類、バター、牛乳で現代の栄養学には相反するところである。勿論スナック菓子を付けず、家族がこれに使った食器類は、神経質と思われるほどよく洗っている。

勤務の都合で現在別居しているが、母も齢と共に楽しみも減ってくるので先日テレビをプレゼントした。最近耳が少し遠くなった

側からかえると酔翁筆をと

○

(27) 元

宋を亡ぼした元は北方民族蒙古人のたてた国であります。嵐の如く中国をかきまわし、嵐の如く北へさってゆくのです。

しかし、アジア、ヨーロッパにわたるその領土は世界最大といってよく、この広大な国土をしばらくでもよく統一しました。日本及びジャバの遠征は海に馴れない蒙古人には両方とも失敗に終り、亡国の原因の一つにかぞえられています。

中国固有の文化には同化出来ませんでした。が、京劇、シナ芝居をおこしたり、小説を好んだりして、今までになかった部分にプラスした部分も少くありません。

マルコポーロが永く元朝につかえ、帰国後、東方見聞録を発表し、ヨーロッパ人の新

航路、新大陸発見に大きな刺激をあたえたことは有名すぎるほど有名です。

その東方見聞録にジバングの名で日本の事が出ており、金すくめの国のようにかいてあります。これはマルコポーロの見聞の聞の方でありまして、元主にすすめて、日本侵略をすすめた張本人であるともいわれております。

とにかく、日本人自身は一向知らぬ間に、ジバングの金で世界史をうごかしていたの一寸愉快にもなってきた

す。



コロンブスなどの活動に、このジバングが、相当の役割をはたしているらしく、ヨーロッパは中世も終り、商業が勃興してきた時期でもありません。

金々々ジバングの夢わすれず
神風を信じ国書を破りす
水滸傳「元」は阿片と知らずほめ

の鳥籠にさっきの鳥を入れて女の子と一緒にやってこられた。「子供がどうしても飼うと言ってきた。えらい高い小鳥についてしまった。」「朗らかな笑顔を残して帰って行った母と子の間に大きな鳥かごがユラユラ揺れていた。

○
遠い親戚で俳人のKさんを奈良の黒髪山の麓に訪ねた。青々とした野菜とすり餌を入れた空の鳥籠の蓋を開け放して縁側に出してある。何のまじないですかと言うと、Kさん一すてれたように眼をしばたいた。

実は夫婦ふたり暮して鶯を飼っていた友人が最近奥さんを亡くして昼間世話ができないうので大事にしていた鶯を貰って呉れないかと言うことなんですよ、一ト月ほど前から飼っているんですよ、毎朝の水浴びがなかなか大変、この間の朝、とうとう、その時に逃がしてしまいました。前にも二日はとして帰ってきたことがあると聞いているんで、あおして入口を開けてあるんですよ、あの鶯は吉野の生れですからネ、とKさんは一寸眼を伏せた。鶯は生れた土地でなければ山へ逃げて、生きてゆけないんだそうである。

○
秋篠寺とか中宮寺とかの観光ルートから少し外れて、ひっそりと不退寺がある。山門の墓股は有名であり、裏山には業平の墓があると言われる。早春の光のなかへ溶けこむような柔らかな黄色の花をこまかく付けてれんぎょうが眼にあざやかである。

関西線を細い木橋で越え、ウツナベ、コウナベの古墳が展げる。こんもりした森のまわりに大きな堀をめぐらして規模の雄大なものである。何人のものか定かでないが、相当な貴人のものであることは間違いない。その堀のなかに一そうの朽ち舟がつないであつたのを、夜の闇に誰かが持ち去ったので、生れて初めて始末書というものを書かれましたと係りの人が笑っていた。穴のあった舟板を額にでもしたい好き者の仕業でもありませんか。

その舟をつないであつた杭の上に五位鶯が一羽つくねんと止って何時までも動かないのが、暮れてゆく水面にひどく印象的だった。

○
山陰の石見大田からバスで一時、三瓶山の雄大な姿がひらけてくる。裾野に志学、湯抱等の豊富な温泉をかかえて、ゆったりとした気分は好ましい。

孫三瓶から雌三瓶へ、最高峰の雄三瓶の草原に立った頃は陽射がもう傾きかけていた。右手は遠くかすむ日本海、左は遙かにながれ続く山麓の青、点々と放牧の牛が動くともなく静かに映えている。ふと前方の切り立った山かげから、黒いかたまりがモクモクと湧き上ってきて、ゆるく旋回すると、サーッと沈んでいった。それからガールオカオとにわかに、けたたましい鳴声を立てて山はだにそって消えていった。
カラスの大集団だと気付いたのは、それから後である。眼の裏下の湖が沈みかけた夕陽をまともに受けて真紅に染まっていた。

講	入
座	門

研究題「濡れる」

清水 白 柳



課題を与えられてその課題と真剣に取り組むことは誰にも大切なこととは言えませんが、課題によつてその作家の好きな題と嫌いな題があるようです。好きな題だといくらでも作れるが、嫌いな題だと少しも出来ないという人がありますが、それは課題吟を作句する態度ではないと思います。いくら嫌いな題であっても課題吟を作句するということはレッスンののですから嫌いな題であっても真面目に作句してはいいものです。そして嫌かしい題であればあるほど意欲を燃やして取り組む熱意がなければならぬと思います。今月の題は動詞の題でしたので作句しにくかったと思いますが、面白い句を沢山よせて下さって楽しく読ませて頂きました。

濡れし掌をエブロンで拭き書留に
K
家庭での情景を描き出して居る

6 すが、この句の場合濡れし掌という語が重荷になっているように感じられました。エブロンで手を拭くというだけで濡れた掌が現わされると思うのです。そうすると濡れしはなくてもいいのではないのでしょうか、考えてみたいと思います。緑雨さんの句に「水道の音に書留待たされる」があります、この余情を持った句を味わってほしいと思いました。

1 色事のように片袖濡れ帰る
S
ハンサムと片袖濡らす春の雨
周 甫
春雨へ一人で濡れる阿呆らしき
実 男
春雨に濡れる子叱りや月形だ
勝 子
どちらからともなく濡れる春の宵
高 志
片袖の濡れる相合うれしがり
K

7 相合傘肩の雫をうれしがり
J
8 合かさは肩を濡らして気にもせず
他 郎
9 子を入れて自分は濡れる傘をさし
勝 子
濡れるという題から先ず考えられるのが、有名な「春雨だ濡れてゆこう」の月形半平太の台詞です。そして相合傘です。そうした句の中から、1の句は色事のようにということで友達か何かと相合で来たのを現わした心算でしょうが、それだけの報告に終っているようです。2の句はハンサムと具体的に言ったのが、まあ取柄でしょうが、3の句の自嘲的な表現の仕方が面白いと思いました。阿呆らしさと突き放したのが軽るすぎるように感じられました。4は春雨だの台詞を使って、月形だと言いつつた処が意表をついて成功した句です。5は情緒でんめんたる処を描き出したのですが、平淡さを免れないようです。どちらからともなくで春雨ということが出ているのですが惜しい作品です。6の句は下五のうれしがりと言明してしまつたのでは句としては成功しているとは言えません。7の句も同じことが言えます。8の句は下五文字の氣にもせずと表現したのがよかつたと思います。うれしがつているのだが氣にもしない程うれしがつているのが佳いのです。9は親子の愛情を詠んで成功

しています。説明に陥ち入っていないところが佳いと思いました。

A 水遊びするなとママがまた叱り
Y
B 濡れている小さな足へママが追い
T
C 水遊び廊下の足を叱られる
和 三郎
Aの句はそのことをそのままに言っただけで句としては平凡にすぎます。Bの句も、もう少しというところですが。突込んだものを持っていないのが弱点です。小さな足へは足をではないでしょうか。Cの句は廊下がよかつたと思えます。廊下を句の中に現わして、その子供の今迄遊んでいた場所を思わせるのが、句の深さということになるからです。

少々濡れても氣にせぬ若いなあ
S
若い人に対する羨望感なのですが、句の上に現われた、若いなあという言葉が、とつてつけたように感じられるのがこの句の弱さです。

濡れる程でもなし洋傘亦迷子
S
投句には、濡れる程降らすと書いてそれを消し、でもなしと改めてあるのですが、これは元の濡れる程降らすの方が、ハッキリして佳いと思います。でもなしですと句に強さがありません。亦迷子の辞句も適切とは言えません。降りとなり今朝妻の言濡れ

て居る
T
妻の言うように傘を持って出ればよかつたのに、と濡れ傘を後悔している気持ちを詠んで居られると思うのですが、上五、中七、下五とバラバラの文字が並んでいて、どこか不自然なものになっています。もっと素直に思ったままを句にするように心掛けることが大切で、妻の言う通りに降って来て濡れる」と添削してみました。どうでしょうか。

えびがにが逃げて濡れるのも知らず追ひ
雄 水
濡れるとも知らず深さへめだか追う
東 天組
濡れるのも知らずでなくて濡れるのも忘れの方が面白味が深くなるのではないかと考えて見ました。

春愁う女らし椿土に濡れ
S
椿の花の時季的感覚と、春愁うという感覚的な文字との連けがなく、何故椿を持ってきたかという必然性が見当りませんので失敗作と言わねばならないようです。

1 くやしきは枕カバーが知つてくれ
弘 村
2 濡れる眼にこれから先の現滅図
T
3 諾しやろう男と男瞳を濡らし
八 郎
濡れるという文字を使わないで枕カバーが濡れるのを現わしたのが1の句ですが一寸面白いと思

ました。くやしさを悲しさと置き替えて見ますと、矢張りくやしきの方が深いものを表現するようです、2の句下五現滅図がどうしても理解出来ませんでした。幻滅を感じたのであるとしましても、もつと気楽に作句する練習をしてほしいと思います。"幻滅を感じて濡れる眼で見つめ"として見ました。3の句は素直に詠まれているのが佳いと思いました。諾しやろうの諾しは、殊更にこの字でなくとも、よしやろうと仮名であっても差支えないと思います。

軒下じや濡れませんかと問うてくれ 一 鶴

余りにも多く詠まれている境地なので、非常に損な句です。だれもが着想し、だれもが一度は作っている境地ですから、これから抜け出ねばならないと思います。

折りたたみ時雨に濡れる身を かばい 繁太郎

身だしなみという下五の句も書き添えてありましたが、身をかがいの方がよいようです。身だしなみだと、濡れると矛盾してくるようです。身をかがいもやや理屈めいているのが難点でしょう。

景観を飛瀑にぬれている旅情 T

文字の重くるしいのかかわらず句の内容が軽いと言えるようです。絵葉書に書き添えたその場限りの句の感じがします。

停電に濡れ雑布を踏んづけぬ 弘村

着想の奇抜さが目につきまし、そしてその驚きをユーモラスに感じさせる表現も佳いと思います。

噴水塔うかうか濡れて佇つ二人 静観堂

さらつとした詠み方になっているのが、若さを感じさせて佳い句になって居ります。

濡れ出した下だけサーカス空いている 八九寸

この句は着想の広さを感じました。濡れるところが空いているサーカスの客席を句にして居られます。俄か雨のデント小屋でしょう。

恐ろしく水着の濡れるところ迄 生薑

女の児の海水浴の描写ですが、上五文字にもつとフィクションがあってもいいと思います。

叱られたらしい子供の雨に立ち 静水

よう傘もささぬに外に出たがって 雄水

二句とも濡れるという題を消化して成功している句です。着想も表現も佳いと思いました。

斯うなれば濡れるにまかす 高志

急がずば濡れざらましを旅人のあとより晴るる野路の村雨という古歌の旅人の気持を句にしたもののように感じられた句です。

悠々のカンバスへ宿の迎え傘 八九寸

落つて払った画家の面目をいかになく描き出していて面白い句であります。

干し物が濡れる隣は共稼ぎ 勝子

取入れるのを忘れて出勤したお隣りの洗濯物が夕立か何かで濡れるのを、気にしながらもながめて居るのか、或は取入れてあげるか句の上からは判断することがむつかしいようでしたが、句を温かく解釈する点から、取入れてあげるのを省略してあると思いたい句であります。

濡れついで隣の樋をはめてあげ 静水

久しく雨が降らなかったで樋の落口がはずれているのに気がつかなかつたのを、下水の掃除が何かで濡れたついでに、隣の樋の落口のはずれたのをはめてあげたという句意にとつたのですが、作者の作意と違つた解釈になったかも知れません。それは、この樋が田圃の水の取入口の樋であるかも知れないからです。

濡れて来てまず財布からたしかめる 光道

誠によく詠まれて居ります。まず財布からのまずが千均の重みを持った字句で、これによって句が生きて来ていると言えます。佳句として推奨したい句であります。

最後に一鶴さんの妹さんの御長

男が交通事故で亡くなられた歎きを句にされて、

事故死させた愛児へ妹泣きぬれる 一 鶴

と詠まれて投句して居られるのですが、こうした句は批評することが出来ません。謹んで御悔み申し上げます。

次回研究題「葉」

切 五月十五日

発表 七月号誌上

宛先 大阪府南河内郡美原町丹上四〇四 清水白柳

現代柳人録

- (一) 姓名 (二) 雅号 (三) 別号
- (四) 現住所 (五) 生年月日 (六) 出生地 (七) 職業 (八) 電話 (九) 自信の句一句 (一〇) 川柳以外の趣味 (一一) 配偶者の有無 (一二) 川柳に手を染めた年月
- (63) 松井可笑
- (一) 松井 実 (二) 可笑 (三) 明治35年10月27日 (六) 竹原市新町四〇六七 (七) 岩工会議所専務 (八) 四一二 (九) この時を言わんロレッツが廻らない (一〇) 刀剣 (一一) 有 (一二) 大正十二年
- (64) 松江梅里
- (一) 松江文夫 (二) 梅里 (三) 宗文 (四) 大阪市阿倍野区松崎町一〇 (五) 明治40年5月19日 (六) 大阪市南区鰻谷東之町一 (七) 割烹 (八) 〇三九三五 (九) 喜びに明けて感謝で暮す日 (一〇) 茶、華道、謡曲 (一一) 有 (一二) 昭和十五年九月
- (65) 鹿野五郎
- (一) 鹿野五郎 (二) 五郎 (三) 川柳堂 (四) 山形県天童市駅前 (五) 大正11年3月7日 (六) 出生地に同じ (七) 印刷業 (八) 二八三五 (九) 狸汁みんな化されそうな顔 (一〇) スポーツ放送を聞くこと (一一) 有 (一二) 昭和十五年十月
- (66) 北村白眼子
- (一) 北村修一 (二) 白眼子 (三) 展恵洞 白雨 (四) 函館市東雲町一三 (五) 明治28年11月3日 (六) 三重県多気郡相可町 (七) 歯科医師 (八) ③一三三七 (九) 想出となれば憎めぬ人ばかり (一〇) 俳句 (一一) 有 (一二) 大正十二年十二月
- (67) 越智伽藍
- (一) 越智章介 (二) 伽藍 (三) 明治35年4月16日 (六) 高知県吾川郡伊野町 (七) 会社員 (八) 二八三 (九) 大金庫開けて会計朝のお茶 (一〇) 旅行、野球 (一一) 有 (一二) 昭和二年四月

社用族

川村好郎選



路

集

社用族ツケの利くのが仇になり 弘村
上役のスキーもかつぎ社用族 同
社用族自分の酒を飲みなおし 同
社用族愚痴を並べて今日も飲み 輝次
部下等へ奢ったのまで社へまわし 弘道
家庭では耐も飲みます社用族 葵丘
社用族贈賄の記事を読みなおし 同
蜂の巣のような団地の社用族 卯之助
社用族公用族とうまが合い 実男
社用族土産も如才なくはずみ 淀月
こわい程騒ぎ飲めるも社用族 竜蔵
社用族別に一折さげて去に たもつ
社用族チップに領収書が要り 与根一
真直ぐに帰る社用で肩がこり 泉洋
社用族何かボソボソバーの隅 照児

麻雀を上手に負ける社用族 素身郎
呼んでみたかった妓を社費で呼ば 同
社用族酔うてはならぬ酒を飲み 同
社用族長距離電話でうそをつき 涼髪
社用族いつしか喉も狭くなり 雄々
胡麻をする事にも馴れて社用族 藤波
社用族我世の春が短かすぎ 同
社用族重役コース踏みはずし たけお
割勘の時はのれんの社用族 圭井堂
手土産も酒に化けさす社用族 同
二次会も会社のつかけの効くところ 同
名目は会議にしとく社用族 初甫
前々の二次会も入れ社の払い 八九寸
社用族社長以上の法螺も吹き 涼人
社用族飲ませて飲んで悪なし 宗太郎
社用族かくれ遊びでない 元氣 紡毛
経営をけなして飲んでる社用族 尉介
昼食はうどんで済ます社用族 山根坊
社用族今日馬鹿らしい自費で発ち 静水

強肝剤も用意して来た社用族 天悟空
社用族会計さんからチト小言 一鶴
有芸に秀でて重宝な社用族 同
逢引きの今日も社用にしてみよう むじな
上役の馴染みが悪い社用族 豊年
社用族出張かねてする帰省 季賛
社用族一夜明けければ元の平生 萱
女将には頭上らぬ社用族 同
社用族になれて汚職も目にあまり 雪峰
旅の恥上手にかいて社用族 恵二朗
社用族家の二級のうまいこと 圭水
社用族紐付けられている弱さ ひか平
社用族と踏んだデタメの酔ぎの振り 天悟空
三つ指へあぐらをかいて社用族 初甫
人
社用族ビエロの役も相勤め どんたく
地
社用族あまり切れても恐れられ 一峯
天
課長女将打合せてる領収書 八九寸
軸
出張へ自分の金も少し持ち ち
味方
河村日満選

社長だけ味方に持って女秘書 照児
味方をも欺むきスバイ板につき 弘道
純情な方へ女将は味方する 与根一
味方にも派閥があつてまともさ 井蛙
味方から秘密が洩れる日の落目 藤波
勝つ目途がついて味方が多くなり 素身郎
新聞を見ながら母に味方する 秀峰
応援団八対零に声をのみ 隆史
敵味方なく感激の渦に酔い 素人
子がみんな妻の味方と阿呆くさし 一鶴
味方だと思えばこそその苦言なり 九呂平
声援の割に軍資金のない味方 生蔵
美人の方に味方をしとく 鮎子
味方から裏切りが出た大騒ぎ 圭水
良心を味方を売った日から捨て 十九平
世相とは哀し悪魔に味方が居 静水
金づるが切れて味方に寝返えられ 光福
飲んだ時だけの味方でたよりなし 光道
味方より敵が実力買つてくれ 実男
小姑の中で末ッ娘だけ味方 淀月
末ッ子へ矢つ張り母は肩をもち 代仕男
同郷のよしみなんととはなく味方 卯之助
神様も味方になってほしい 恋 雪峯
色分けをせいと味方を知りたがり ひか平
妻だけが味方静かにお茶をつぎ 草々
開けてみて敵に廻っていた味方 圭井堂
同調はしても味方に入れてなく 尉介
妹を恋の味方にして使い 初甫
四面楚歌を支えてくれる友と酌み 素郎

黒幕が味方に居るといふ自信 庸 佑
車中談味方も煙にまかれとり 光 郎
父の味方母の味方と子 沢 山 むじな
味方だと信じ課長をこきおろし ゆたか
ばあちゃんを味方に駄々をこねまわし 恵二朗

子が皆んなママの味方になる喧嘩 古 心
味方だと思つていたから腹が立ち 同
母さんの味方となつて桶をつき 蜻 蛉

婆さんの愚痴爺さんが聞いてくれ 同
味方まで裏切つたのが出世をし 葵 丘
淋しさは老いて吾子に裏切られ 同

頼りないけれど味方の数に入れ 南 宗
味方してよけいな事を喋り出し 同
幼稚園敵も味方もない勝利 旭 峯

味方から古い秘密をあばかれる 同
兄ちゃんを呼んで来ると子の喧嘩 ひろし
妻だけが味方親仁の意に背き 同

弱いので取巻いた腫が味方する 和 三 郎
権力へ味方せぬ気のコップ 酒 同
好転のささし味方にまでとほけ 宗 太 郎

妻母の味方になつて慈なし 同
住
百万の味方女房に励まされ 静 水

馬を射る策に味方も引っかけり 圭 井 堂
本当の味方のはしい姉となり 旭 峯
応援がワアワア味方まであがり 実 男

赤旗でデモの味方に迎えられ 雄 々
人

四面楚歌妻子も味方とは言えず 十九平

地 金持を味方にしたい十二月 旭 峯

天 キャラメルを持つて味方になり来る 蛙 水

軸 ビク破り味方であつた顔も居り

ウインク

森下愛論選

ウインクにおのが四十を忘れ 徹 也

もう酒が切れたと妻がウインクし 弘 村

ウインクに浮気の虫が踊り出し 輝 次

ウインクに迷わされる使ひ込み 淀 月

ウインクへ踏まれた痛さグツと耐え 弘 道

さりけないうインク午後を約束し 司 住

ウインクですべて通じる仲となり 葵 丘

ウインクをして人ごみを遠ざかり 藤 波

ウインクへおつとあがない千鳥足 卯之助

懷をねらうウインクとも知らず 実 男

ウインクのうまい女へ過去があり 同

悪口の脊後あわててウインクし 与根一

老婆が嫁のウインク真似ている 八 郎

妻若しウインクをして朝を出し 井 蛙
ウインクを見落し膝をつねられる 素身郎
ウインクの女に大阪こわいとこ 保 夫
朝毎のウインク近処にうわさされ たけお

御返盃ですとウインクして酔がれ 圭井堂

愛情を示すウインクとも知らず 初 甫

ウインクの楽しみ胸に朝を出す 繁太郎

ウインクは金を持ったら又おいで 涼 人

ウインクも阿呆らしい倦怠期 不 臭

ウインクも通じぬ野暮を見込まれる どんたく

ウインクによろめき財布の底はたき 光 福

ウインクに酔つてもみたい七十五 山椒坊

年甲斐もないウインクにあたりを見 静 水

ウインクに反応のないじれつたさ 光 郎

ウインクならおれにまかせとグツグツやん 一 鶴

ウインクを送る街角までの恋 素 人

ウインクもされずに老るばかりなり 竜 蔵

ブロマイドへウインクしてから出勤し 光 一

終着駅悔いてウインク気づくあと 隆 史

お別れね達者でねとウインクし 秀 峰

つつましくウインク古風な恋育て 光 道

ウインクを上手にうける媚をもち 雪 美

ウインクに思わずくすす顔の相 南 宗

ウインキーブーム買わずに過ちまい むじな

ウインクが今日の移を無駄にする 代仕男

化粧したついでにウインクのポーズをし ゆたか
ウインクは上手アフレの尻を振り 豊 年
ウインクへ心得顔でついてくる ひろし
云い切れずウインクで後を足し 蛙 水
ウインクで止めた彼を紹介し 鮎 子
ウインクが一瞬姑の肩をとび 生 薑
ウインクがエレキのように引きつける 旭 峰

ウインクを送れば得心した素振り 古 心

ウインクが届いて彼女をまごつかせ 雪 峰

共学の教室ウインク混線し 恵二朗

反応を試すウインクやけに派手 十九平

ウインクも好きな人には別のもの 圭 水

カクテルの酔ウインクも派手になり ひか平

人 ドサ廻りしてウインクがこうもうけ 宗太郎

ウインクが大の男の骨を抜き 孝 風

女将おば中継にして来る 秋 波 八九寸

地 勘づいてほしいウインクじれつた 孝 風

ウインクの返し喫茶の隅で受け 九呂平

天 ウインクにある日の若さなぶられる 草 々

品質優良

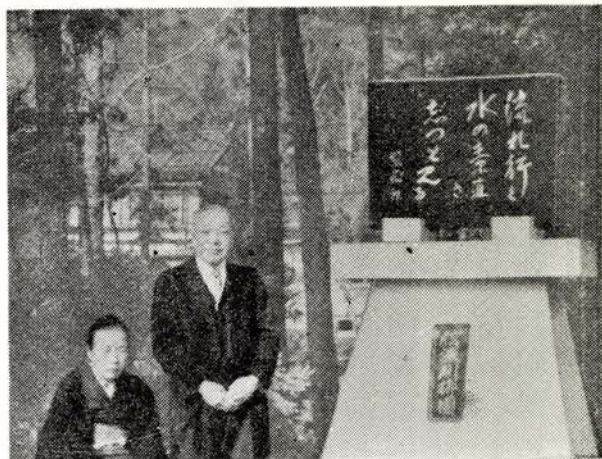
先カペン



タチカワペン
タチカワゼム
タチカワ画紙

大阪市東区常盤町一丁目十一番地
立川ペン先株式会社

柳界 展望



奥信濃湯田中温泉の 中島紫痴郎翁の句碑と翁夫妻

た由。▼大阪連
信病院四月句会
は十五日(土)
午後二時から五
階会議室で開
催。▼コクヨ川
柳会(大阪市)
句会が四月二十
一日(金)午後
五時半から黒田
国光堂で開催。
▼南海電鉄川柳
句会(大阪市)
は四月二十七日
(木)難波親和
クラブで開催。
▼川崎浜寺支部
復活二周年記念
句会が四月二十
八日(金)午後六時から諏訪森会
館で開催。▼川維奈良支部創立の
句会が四月二十二日(土)奈良高校
で開催。以上諸郎主幹出席。▼岡
山県下川維各支部連合吟行大会は
四月十六日午前十時半から後楽園
藤池軒で開催。▼ひろしま川柳第
一例会は四月一日(土)午後六時
から広島聖二階会議室で開催。
▼久良伎翁十七回忌追福川柳会が
四月三日(月)東京都王子園屋で
開催された。▼新潟県下川柳大会
が六月二十五日(日)午前十時か
ら新潟市日宝町青年研修所に於て
開催される。選者三太郎、宣介、
信子、夢之助、風太郎、柳堂、凡
桑、風柳、冬選者あて二句、同一

の句を投ずることを禁ず計十六
句。六月十五日までに百四封入投
句のこと。▼川柳きやり吟社五月
句会(東京都)は五月六日から千
代田区神田須田町二ノ二五柳森神
社で開催。▼田中長二氏の句碑除
幕式と八代川柳研究会十五周年記
念句会が四月二日八代市古鏡、春
光寺で開催された。▼第十五回長
野県川柳大会は五月十四日(日)
午前十時から湯田中温泉、旅館ま
るぶんで開催。兼題は記念碑、ベ
ン、団地、札束、明
日の夢、断崖、大学、
各題三句、投句は百
四封の上十二日迄
に長野県中野市中町
奥しなの川柳社宛。
▲番傘北斗会二五周
年記念パーティー
(大阪市)が五月七
日正午から都島区網
島の太閤園で開催さ
れる。当日のパーテ
ィー券五〇〇円、申
込所大阪市大淀区本
庄西二丁目二六田中
金波方。▼観光川柳
五月句会(東京)は
十四日午後一時から
港区芝新橋六ノ六六
伊藤路天居で開催。▼ふあうすと
川柳社(神戸市)では第六回全国
川柳作家合同句集(同誌六月号特
集)で募集されている。詳細は長
田区東尻池町四ノ三五同社へ問合

せのこと。▼平安川柳社(京都
市)では五月一日夕六時から寺町
仏光寺上ル透玄寺で五〇号を祝う
会を開催される。▼川柳文学社
(大阪市)では五月一日大阪美術
倶楽部で陶淵忌を営まれる由。
消 息
▼路郎主幹は四月一日(土)午後
二時から、朝日会館で開催された
アジア・アフリカ作家会議講演会
に出席され、五時から太閤園での
歓迎夕食会ではソ連代表のデーブ



岡山県下川維各支部連合吟行(後楽園藤池軒での一部の人たち)

の句を寄せられた▼池田可寄氏(長崎市)は天皇皇后ご巡幸のみぎ
り、同氏の作品、川柳のれん及テ
ィアのセンターの二枚つづが天
寛光栄に浴さることとなった。
川柳のれんの天寛はこれをはじめ
である。氏のようにこびを柳友に広
く伝えたい。句は「おらんだ坂の
ひるしずかなり鐘が鳴る」「じゃ
囃子のいまじやの鱗鳴る如し」
の二句。▼路郎主幹は四月九日
(日)阪急百貨店六階美術部で開
催中の岸本水府作品展をのぞか
れ、水府氏夫妻と歓談された。
▼西尾榮氏(大阪市)は四月五日
東京への商用の帰途、湯河原温泉
に遊ばれた。「出張の途中下車
湯のマーク」。▼八木摩太郎氏
(堺市)が川柳指導を続けられて
いた富柳会(富田林市)は公民館
の公民講座になり、四月から立派
な市長杯が寄贈され、これを争奪
することとなった由。▼若林草右
氏(大阪通信病院川柳会々長)は
三月末に大阪通信病院内科医長か
ら副院長に昇格された。▼西尾榮
氏(大阪市)は四月五日東京から
帰阪されると九州の令姉の危篤の
報に接しられて直ちに西下され
た。▼木村水洞氏(大阪市)はリ
ュウマチ性関節炎で難渋して
居られたが、新年度の四月一日か
ら出勤して居られる。▼田中辰二
氏(熊本市)は動脈硬化の治療を
続けておられるが、最近耳も少々
不自由を感じていらる由。▼米
沢晴明氏(大洲市)は三月二十七

会館(天王寺電話局東隣)三階会
場で開催、ゴールデン・ウィーク
明けを生氣ある句で引締めるよう
柳友お誘いの上多数のご出席をお
願いする。▼南区医師会文化部杏
林川柳句会が故長谷川迷路医博を
追悼して四月十八日(火)午後七
時半から南区三休橋南詰中島小児
科診療院上で開催。故人迷路の
令兄福井野迷路氏の追懷談があつ

▼本社会
月句会
八日(月)
午後六時
から、上
六の関西
八日(金)午後六時から諏訪森会
館で開催。▼川維奈良支部創立の
句会が四月二十二日(土)奈良高校
で開催。以上諸郎主幹出席。▼岡
山県下川維各支部連合吟行大会は
四月十六日午前十時半から後楽園
藤池軒で開催。▼ひろしま川柳第
一例会は四月一日(土)午後六時
から広島聖二階会議室で開催。
▼久良伎翁十七回忌追福川柳会が
四月三日(月)東京都王子園屋で
開催された。▼新潟県下川柳大会
が六月二十五日(日)午前十時か
ら新潟市日宝町青年研修所に於て
開催される。選者三太郎、宣介、
信子、夢之助、風太郎、柳堂、凡
桑、風柳、冬選者あて二句、同一

の句を投ずることを禁ず計十六
句。六月十五日までに百四封入投
句のこと。▼川柳きやり吟社五月
句会(東京都)は五月六日から千
代田区神田須田町二ノ二五柳森神
社で開催。▼田中長二氏の句碑除
幕式と八代川柳研究会十五周年記
念句会が四月二日八代市古鏡、春
光寺で開催された。▼第十五回長
野県川柳大会は五月十四日(日)
午前十時から湯田中温泉、旅館ま
るぶんで開催。兼題は記念碑、ベ
ン、団地、札束、明
日の夢、断崖、大学、
各題三句、投句は百
四封の上十二日迄
に長野県中野市中町
奥しなの川柳社宛。
▲番傘北斗会二五周
年記念パーティー
(大阪市)が五月七
日正午から都島区網
島の太閤園で開催さ
れる。当日のパーテ
ィー券五〇〇円、申
込所大阪市大淀区本
庄西二丁目二六田中
金波方。▼観光川柳
五月句会(東京)は
十四日午後一時から
港区芝新橋六ノ六六
伊藤路天居で開催。▼ふあうすと
川柳社(神戸市)では第六回全国
川柳作家合同句集(同誌六月号特
集)で募集されている。詳細は長
田区東尻池町四ノ三五同社へ問合

の句を寄せられた▼池田可寄氏(長崎市)は天皇皇后ご巡幸のみぎ
り、同氏の作品、川柳のれん及テ
ィアのセンターの二枚つづが天
寛光栄に浴さることとなった。
川柳のれんの天寛はこれをはじめ
である。氏のようにこびを柳友に広
く伝えたい。句は「おらんだ坂の
ひるしずかなり鐘が鳴る」「じゃ
囃子のいまじやの鱗鳴る如し」
の二句。▼路郎主幹は四月九日
(日)阪急百貨店六階美術部で開
催中の岸本水府作品展をのぞか
れ、水府氏夫妻と歓談された。
▼西尾榮氏(大阪市)は四月五日
東京への商用の帰途、湯河原温泉
に遊ばれた。「出張の途中下車
湯のマーク」。▼八木摩太郎氏
(堺市)が川柳指導を続けられて
いた富柳会(富田林市)は公民館
の公民講座になり、四月から立派
な市長杯が寄贈され、これを争奪
することとなった由。▼若林草右
氏(大阪通信病院川柳会々長)は
三月末に大阪通信病院内科医長か
ら副院長に昇格された。▼西尾榮
氏(大阪市)は四月五日東京から
帰阪されると九州の令姉の危篤の
報に接しられて直ちに西下され
た。▼木村水洞氏(大阪市)はリ
ュウマチ性関節炎で難渋して
居られたが、新年度の四月一日か
ら出勤して居られる。▼田中辰二
氏(熊本市)は動脈硬化の治療を
続けておられるが、最近耳も少々
不自由を感じていらる由。▼米
沢晴明氏(大洲市)は三月二十七

の句を寄せられた▼池田可寄氏(長崎市)は天皇皇后ご巡幸のみぎ
り、同氏の作品、川柳のれん及テ
ィアのセンターの二枚つづが天
寛光栄に浴さることとなった。
川柳のれんの天寛はこれをはじめ
である。氏のようにこびを柳友に広
く伝えたい。句は「おらんだ坂の
ひるしずかなり鐘が鳴る」「じゃ
囃子のいまじやの鱗鳴る如し」
の二句。▼路郎主幹は四月九日
(日)阪急百貨店六階美術部で開
催中の岸本水府作品展をのぞか
れ、水府氏夫妻と歓談された。
▼西尾榮氏(大阪市)は四月五日
東京への商用の帰途、湯河原温泉
に遊ばれた。「出張の途中下車
湯のマーク」。▼八木摩太郎氏
(堺市)が川柳指導を続けられて
いた富柳会(富田林市)は公民館
の公民講座になり、四月から立派
な市長杯が寄贈され、これを争奪
することとなった由。▼若林草右
氏(大阪通信病院川柳会々長)は
三月末に大阪通信病院内科医長か
ら副院長に昇格された。▼西尾榮
氏(大阪市)は四月五日東京から
帰阪されると九州の令姉の危篤の
報に接しられて直ちに西下され
た。▼木村水洞氏(大阪市)はリ
ュウマチ性関節炎で難渋して
居られたが、新年度の四月一日か
ら出勤して居られる。▼田中辰二
氏(熊本市)は動脈硬化の治療を
続けておられるが、最近耳も少々
不自由を感じていらる由。▼米
沢晴明氏(大洲市)は三月二十七

不朽の人々



梅志氏(博也)の講演を聴く

雑念があるのかそこら揺ゆくなり

(梅志)

私の句会出勤は、大抵語いの舊古婦が多く遅刻勝ちだが、こうして披露をきいていると、川柳の方も語いと同じ恰好だけで、ちっとも世の中を見る目が肥えてこない。こんなぐあいには悪いが至って正直者。胃袋は確かで百人に一人の先天的。酒も、タバコも人並。好物はとろろ。にしなりに、在住二十二年。

日(月)来阪、本社を訪問され、路郎主幹夫妻と歓談された。▼福田路氏(高槻市)は四月一日からの修学旅行附添いで九州へ。雲仙・島原・熊本から阿蘇山を廻り、杖立温泉別府温泉を巡遊、五日帰阪された。長崎にて「鐘が鳴るオランダ坂に棲散る」。▼渡辺曉童氏(愛媛県)は町役場の団体旅行で四月九日宮島・広島へ遊ばれた。末娘容子さん同伴の子供本位の酒抜きの旅も亦格別な味でした。▼徳水雅美氏(大阪市)は家業が一時に多忙を極めた上、日赤、防犯、町会等の役員を兼ねて居られるので、猫の手どころか百足の足を借りられたらと思う程です。▼越智一水氏(今治市)は松川事件の現地調査公判傍聴全国集会の今治地区代表として三月廿七、八日出張、福島から通信があった。▼河相すむ氏(西宮

市)は四月二日(日)地質学の学会出席のため上京、東京も汗が出る暖かさですと「いつはつるともなくお江戸ビルが建ち」の句信を寄せられた。▼菱田満秋氏(大阪市)は四月九日、天の橋立に遊ばれ「橋立の雨噴水のように見え」の句信を寄せられた。▼工藤甲吉氏(青森市)は四月、東奥日報社の政経部長に就任された。「著もって政治経済考える」。▼永松東岸氏(岡山県)は三月十九日の大万川柳十周年記念大会に来阪されたり、四月九日の並木会創立六周年記念大会に出席されたりの大活躍であったが、最近心臓病が悪化、自宅で静養して居られる。▼築山快夢氏(ホノルル市)夫妻はロサンゼルス令息の歓待をふり切つて滞在四十日余りでパーグレー経由四月三日帰阪された。二千五百哩を五時間足らずで飛ぶ

ジェット機の有難さ。ロス市滞在中、森田玉鬼氏宅へ三度程訪問、サンフランシスコでは見玉不村氏を訪ねて大いに柳談されたが、両氏とも大の路郎先生びいきで、その作風を慕つて居られたとのこと。▼後藤閑人氏(仙台市)は四月十九日に白浜で職業上の全国大会参加のため来阪されたが、時間の都合で会えないとのこと、折角の好機を逸した。▼深井凡々氏(奈良県)は高橋月南老句碑建設に多忙の日を送つて居られる「足袋白く巷に春は溢れてる」。▼河相すむ、樋口舟遊、橋高薫風子の諸氏は四月十六日岡山後楽園での県下川柳支部連合吟行大会に出席、久米雄、麦太郎、七面山の諸氏等と交歓され、句会終了後、香林氏宅を訪問柳談に時の経つのを忘れられた。▼那谷光郎、野村味平両氏(加賀市)は四月廿二

日、小豆島巡りの旅に出られ、梅田駅から「梅田駅車中眠れぬ寝たれ知り」(光)「駅の雨しばしベンチへなじむなり」(味)の句信を寄せられた。柳書・句集▼「雨譚註万句合」が近く二百部限定の出版で発刊される。雨譚旧蔵の万句合原本のその略註を施した句凡そ二千四百句を略註ともに写し印刷に附したもので、頒価三百円。希望者は送料八円と共に東京都北区堀船一ノ一、製紙博物館気付古川柳研究会へ。▼西塚春魚著「句集一」が昭和三十六年四月二日、八戸市月丘町二九西塚春魚から刊行された。非売品。

慶弔

肝便愛のため大和高田市本町自宅死去。年六十九。葬儀は十七日午後二時から執行された。本社から密一対が贈られ路郎主幹の弔詞があった。氏は生前路郎主幹に師事し、句歴四十年、昭和三十年から朝日新聞紙上の大和柳壇の選者として後進の指導に尽された。遺詠は「お浄土の原稿箋は連ですき」。謹悼。遺族は未亡人と一男二女。▼西垣錦風氏(奈良県)の母堂ツルさんは三月二十一日午後五時四十分心臓麻痺のため死去。年七十三。告別式二十四日午後二時から大阪市阿倍野区北畠の令兄西垣武彦氏自宅で執行。本社からは路郎主幹が焼香された。▼金井有為郎氏(長野県)の母堂が二月二十一日、老衰のため死去された。年八十三。謹悼。

改名改号

▼木村水洞氏(大阪市)は本名健次郎を匡利(まさとし)と改名、雅号水堂を水洞と改められた。

転居

▼新川博也氏(大阪府)は大坂府泉北郡高石町富木府営住宅五三三の旧居へ帰られた。▼阿万万氏(大阪市)は大坂府大淀区中津南通二ノ五国鉄宿舎三ノ二へ移転。▼九川初甫さん(芦屋市)は芦屋市船戸町二番地ノ三へ転居。▼田口麦彦氏(福岡市)は福岡市箱崎町原田一二一、川島敏子方へ転居。▼野村味平氏(加賀市)は加賀市大聖寺天神下町六番地へ転居。

金 泥 集

課 題「卵」

麻 生 菫 乃 選

スカウトの金の卵を生んだ母 阿茶
卵としレースの様に薄くかけ 同
蝸焼きも卵を入れた味で売れ 同
五位鷹の卵もまじる山の店 若菜
むぎ玉子食慾の児が待ち切れず 同
今生んだ卵の温み触らせる きさ子
卵焼きれんげの赤がなおうれし 同
卵酒所望する日の上機嫌 小石
お菜の様に卵を母はたべ 同
卵もう倦いたに困るお弁当 都詩子
金糸卵も散らして花のピクニック 同
共稼ぎ今日も卵で辛抱し 一栄
歌謡曲で焼いた卵は狐色 同
紙の様な卵を着てるオムライス 清子
店頭の卵にさえもある器量 同
山二つ越してひろげた卵巻き 徳子
今朝うんだのもまぜて見舞に行く卵 同
初卵持ってお産の娘を訪ね あやめ
子はちゃんと側で待ってる卵焼き 同
闘病のあるじへ卵産みつけ 奈良子
インスタント今朝もふたりの目玉焼き 同
一人っ子卵のげつぷ出している 俊江
目玉焼なら任しとき新世帯 同
今の世に値下るものは卵だけ 周甫
初卵家内の数だけ待って割り 同
卵しか食べぬ息子に祖母育て 夢
鶏卵の下落が親の鳥を売り 知恵
ゆでたまご大きいから消えてゆき 由子
母の風邪特効薬は玉子酒 友子

次回題「耳打ち」〆切五月末日



苦 笑 善 哉

友 を 語 る

木 山 遠 二

友人万秋はその昔——二十歳の頃から新聞雑誌の歌壇で活躍したものだ、三十歳の正月を迎えると共に、ピタリと投稿をやめてしまった。

私が川柳を始めたのも矢張それとおなじ頃だったが、私は今も尚新聞雑誌への投句は、ほそぼそながら続けている。

万秋は年とつても一向に頭の働きが衰えぬ男だが、私はもう十年も前から閑忘と云う奴に悩まされている。

「俺は満で六十二かいな三かいな」と頭を捻っている

「君は明治三十一年二月一日生だから満の六十三、歎えなら四だよ」と万秋が傍から明快に教えてくれると云う調子である。彼は現在も作歌を続けて居り、歌会等にもかなり手広く顔を出していると云う。それならば何故投稿をやめたのだろうか。本人は何も云わないうが、思うに彼の歌は三十歳にして既に完成したが為ではあるまいか。それに比べて鈍物の自分は六

十の坂を越えてもさっぱり物にはならない。おそらく百歳になっても投句は続けるであらう。

要するに才人万秋は投稿せぬと云うそのことに誇りを感じて居り、鈍物の自分は投稿によって一生を暢気にたのしんでいる。そう私は考えて居る。

鈍物でよかったなと思う。

○

柳友荷露は近來めきめきとのし上げて来た。ベテラン揃いのD川柳句会に於ても、彼は一年を通じて優位を続けて来た。そのD川柳会での私の成績は、彼の得た点数の半ばにも達していない。だが彼の柳歴は私の柳歴の半ばにも満たないのだ。だからいつまで経っても私の方が先輩と云うことになる。

そこでその荷露を私が擱えて「題詠に打込むことも勿論結構だが、自分の生活を詠むことも忘れてはいけないよ」

「何分にも忙しくて……」

「そうだね、無理をしてはいけない、でも夜一回位は目がさめるた

お知らせ

バックナンバーご入用の方は、往復ハガキで御問合わせ下さい

川柳雑誌社

イを入れて来た。

「ア、俺か……俺は禁酒だよ」

何はともあれ先輩の感と云うものは、のんびりしいいものである。

日好日みんなの邪魔にならぬよう

遠二

いのちある句を創れ



投稿規定

▼用紙は原稿用紙▼文字は正
確▼締切毎月十五日▼投稿先
本社宛

本社 四月の会 (大阪市)

4月7日 午後6時

会場——関西会館

ソ連の宇宙人第一号が、地球を一周して無事に予定地へ帰ってきた。これで月世界への旅行も可能に一步近づいたことになる。とにかくこの句会のあった四月はこのような意味からも「一つのおもい出」になろう。

郊外は花いっぱい、句会は川柳いっぱいへ呼びかけているが、出席率が少し落ちてきたのはどうしたことであろうか。新しい人の雅号がウソとふえたことは力強いことだが、ベテランの方々の名がチラホラより見えないのはさびしいことである。

病いをおしての山本葉光氏の「出席は句会部を感激させた。この人の悲壮に近い川柳愛には頭が下がった。

戸田古方氏久しぶりの句評である。その熱弁は川柳とガッチリ組んで見事なものである。(本誌25ページ参照)

季候は好調、披露は快調。八時四十分には先生の「事件」も終り、杉前南宗氏

が四月句会の不朽洞賞カップを見事獲得され、桜と匂う佳吟の花にその栄与がかがやいた。

(F)

出席者——路郎・圭井堂・瑞歩・静馬・柳安子・十悟・一三夫・摩太郎・東天紅・多久志・狂二・白柳・八郎・文秋・柳志・すゝむ・敏明・舟遊・与呂志・水京・三司・高史・大客・いさむ・進之助・紡毛・敬也・古方・愛論・落見・葉光・善風・大丘子・繁雄・晴佑・奈見子・紫香・南宗・樹峯・大牙・恒明・いわを・史葉・蕨風子・阿茶・宏子・諷乃

兼題「事件」 麻生路郎選

桜散る事件は眼鼻つかぬうち 蕨風子
事件記者やせてゆくのを妻案じ 阿茶
事件続出政治のまずさ見せられる 一鶴
大ボスの名が出て事件打切られ 牧人
庶民なら記事にならないのがトラジ 八九寸
こんなこと特ダネ事件になつており 季貴
事件屋と言われ図太く生きてゆく 落見
慰謝料じゃ済まぬ事件になつていた 敬也
トップ屋が殺しときいてもらはず 舟遊
一社だけ白で通した鮮かさ 圭井堂
大事件をば青二才あざ笑ひ いさむ
部下ひとり死なせて汚職けりをつけ 静馬
親分が顔だけ出したら済む事件 水客
ドカドカと私服四五人来た事件 愛論
事件一ツ起らぬ村に飽きたらず 柳安子
すわ事件フッパ帰えらぬ日がつき 水京
社会的な事件コノ字の座談会 敬也
誘拐へ街のラジオが呼びかける 摩太郎
事件待ち俺が俺がの記者クラブ 多久志
事件迷宮課長の足は早くなり 宏子

兼題「ささやき」 西 いわをを選

事件記者電話に眠気さまたされる 文秋
事件から手を引け涙みの怪電話 南宗
事件事件デスクひりひりワイド見 一三夫
縄つきが出たと村中手がかず 圭井堂
事件拡大させぬつもり灯が徹夜 進之助
マヌケがあんな事件にしてみたい 愛論
刃もの屋も事件のはしはかつがされ 東天紅
事件そろそろ追い込みという空気 失名
赤坂で汚職事件の筋が出来 一三夫
弁護士を入れて事件をもつれさせ 柳志
事件記者今夜も酔っているらしい 高史
参考人に呼ばれただけで首を折り 失名
この辺が見切り事件師海渡る 三司
週刊誌事件でページかせぎおり 綾女
お札参りのこわさ事件の口ぐみ 敏明
事件事件浮世の春もささやき 摩太郎
大ものをあばいて検事左遷され 静馬
トップ屋のダスターコート濡れたまま 水客
事件記者解決すればすぐに飲み 南宗

兼題「ぜいたく」 八木摩太郎選

ささやきの春ベンチ皆予約済み 繁雄
ブルースがかなでささやき始めたり 善風
春風がささやき咲いてみたもの 阿茶
ささやきもお通夜の晩はしめつけ 多久志
来客へ妻がささやき台所 進之助
ささやきの小徑へ鹿はよりつかず 愛論
ささやいてくれたがお勘定のことだった 多久志
北浜でうまい話をささやかれ 柳志
ささやけばさうかと千円出してくれ 東天紅
愛のささやきへ春の灯がうるみ 牧人
本筋に入ればささやき声になり 柳安子
深刻な顔でささやき聞いている 生薑
ささやきの影を一つにおぼろ月 狂二
ささやいて現行犯で引っぱられ 圭井堂
ささやきが恋の焰となり初め いわを

バトロンのドルでぜいたくする二号 繁太郎
落し目を見透かされまい派手暮らし 八九寸
ぜいたくを言わんとこころ嫁なはれ 多久志
ぜいたくを女自慢にして話し 知恵美
ぜいたくな女に鼻毛まで抜かれ 舟遊
ぜいたくな嫁に家風を二分され 善風
ぜいたくな客に胸病お人に言い 柳志
ぜいたくの夢などすてた釜ヶ崎 一三夫
百貨店ぜいたく品に客が寄り 大丘子
ぜいたくにレジヤブームが輪をかける 静馬
ぜいたくな電化へ母もなじんで来 高史
ぜいたくのまだこの上の復せ業 三司
贅沢の程度が親と子で違い 三司
ぜいたくは言わぬ虫の好いせりふ 南宗
ぜいたくに育つて服病質なたち 愛論

ぜいたくは言わぬが駅に近いと
母の自慢はぜいたくな父やった
ぜいたくでなし自家用の要る生活
ぜいたくな二号の浮気くせ
ぜいたくの出来る二号にならがり
ぜいたくも職業柄でするマダム
ぜいたくなとこ親爺に生きうし
ぜいたくはせぬが引けをとらぬよう
ぜいたくと言うタクシで娘を帰し
ぜいたくに育ちほんぼん弱なり
嫁き遅れぜいたくな言つとれず
社用からぜいたく遊び覚えて来
ぜいたくな嫁小姑とうまが会い
ぜいたくなくせに人には出ししり
手にダイヤ首に真珠のネックレス
ぜいたくを言うなと父も気が弱り
贅沢に毛並の程をうたがわれ
ぜいたくの果は田も売り山も売り

兼題「桜」

菊田いさむ選

桜さくらワシントンでも咲く桜 三司
道行きの舞台は桜の花盛り 一三夫
日米を桜で結ぶ姉妹都市 繁太郎
桜餅吉野の匂いとして売られ 東天紅
一泊の旅の桜を見捨てかね 愛論
満開の桜を描いて駅招き 文秋
桜音頭あの頃日本は強かった 瑞歩
さくらさくら宮城道雄の音をたて 進之助
ワシントン桜バックに舞妓撮り 一三夫
さくら桜こしは死んだ子が六つ 多久志
満員車桜の枝でもめている 高史
夜桜へ恋もあやしく咲き匂い 奈良子
夜桜もいいなと思う星の数 三司
ワシントンで花見をしたと云ふ便り 大芽

気まぐれの桜が秋に狂い咲き 進之助
関東煮の湯気に夜桜散り急ぎ 葉光
葉桜の下で飲んでるバス会社 柳志
お隣りの桜の花を掃かされる 紫香
校庭の桜によい子迎えられ 奈良子
ゴルフ場さくらを遠いところに見る 水客
百度石踏む身に桜用はなし 摩太郎
八重桜咲いて歴史の奈良にする 十悟
大遠忌御室の桜も見て帰り 高史
巡礼の鈴に暮れてく桜土堤 圭井堂
夜桜の雨はしとしと降って良し 紫香
ほろ酔いの肩の桜がまだ落ちず いさむ

席題「雑魚寝」 若本多志選

雑魚寝して思い出深い朝が明け 摩太郎
雑魚寝と決めて年増酔い初め 三司
三次会の果がむほんという雑魚寝 進之助
雑談が消えた雑魚寝へ鶏が鳴き 紫香
紅一点いささかもめている雑魚寝 すくむ
雑魚寝して一人は寝られぬ朝を起き 三司
万に帯めた儘雑魚寝する 圭井堂
雑魚寝して互の秘密語り出し 青風
雑魚寝から逃げてひっそり見る夜景 与呂志
朝飯へ雑魚寝の一人起きてこず 水客
太っちょが雑魚寝の端へ追いやられ 東天紅
雑魚寝していびきが傍へ来た不運 柳志
雑魚寝とはうちみないなんやと子沢山 静馬
舞妓との雑魚寝へ仲居気をつかい 阿茶
ねぐせ気にして雑魚寝は隅の隅 古方
冷えて来たる雑魚寝の蒲団引つられ 文秋
三面は雑魚寝の悲劇また報じ 一三夫
雑魚寝で何んやねんと娘にきかれ 静馬
雑魚寝と聞いてスラックスはいて行き 愛論
雑魚寝して男の理性崩れかけ 進之助

案外なデブ雑魚寝の朝が冷え 水客
合宿の雑魚寝の夢はホームラン 阿茶
思わくがあつて雑魚寝の寝付かれず 与呂志
ハイティーン字引で雑魚寝したかめる 静馬
人情味雑魚寝で分った釜ヶ崎 一三夫
雑魚寝しただけの話を肴にし 大芽
向学に燃える子雑魚寝の中で読み 一三夫
雑魚寝しただけじゃボラツと赤うなり 多志

席題「タイミンゲ」 黒川紫香選

タイミンゲどうあろうとも夫婦なり 静馬
タイミンゲあつて告白うまく出来 舟遊
タイミンゲの悪さ箒を立てるまで 水京
タイミンゲの悪さで漫才笑わせる 高史
電話機を拭けば掛ったタイミンゲ 白柳
タイミンゲ良くタイミンゲよくる男 太芽
タイミンゲはずす眼がねをふいている 太芽
タイミンゲの悪い男にされて無事 水客
横綱へタイミンゲよく勝名乗り 奈良子
タイミンゲずばりと握手賜って 紡毛
タイミンゲよく末席が暖を入れ 徹也
脱線をするはず馴れぬタイミンゲ 葉光
一生の運が狂ったタイミンゲ いさむ
給料袋開けた途端に月賦が来 柳志
タイミンゲの悪さ女の厚化粧 水客
でしやばりにまたタイミンゲはすされて 恒明
大の字に寝てタイミンゲ外しとき 水客
飲みに行く相談車が来て止り 多志
笑わしておいて司会のタイミンゲ 紫香

席題「甘酒」 正本水客選

甘酒を飲む荒神の婦り道 いさむ
甘酒で一息いれる月参り いさむ
甘酒にしなさいと女房になめられる 敏明

本社 天位受賞者(36年度) 四月
句会 ①一三夫③恒明・圭井堂②水客・生々
庵④鴨汀・進之助・梨花・柳志・黙平
・柳宏子・舟遊・万の・牧人・瀬花・
南宗・紫香・多志・古方
不朽洞賞カップ受賞者
鴨汀・水客・一三夫・南宗
金出席者―愛論・圭井堂・恒明・文
秋・一三夫・すくむ・徹也・落見・東
天紅・柳宏子・阿茶・いさむ・静馬・
三司・多志・舟遊・青風・庸佑・八
郎・水京・薫風子・繁雄

甘酒はよいかと聞ける病み上り 水京
甘酒でようぬけぬけと口説いたり 一三夫
実験室の甘酒何やらきたならし 古方
甘酒へ割り箸一本ずつ裂かれ 十悟
甘酒の生姜が風邪の鼻をつき 葉光
寒いほを立てて甘酒吹いている 古方
甘酒は苦手でんねとビールにし 与呂志
甘酒でよい四五人の婦人会 白柳
甘酒へ誘い出された旅の下駄 柳志
甘酒の一本箸が転げ落ち 紫香
西成で甘酒のある喫茶店 白柳
年寄りがいって甘酒も食べて去に 紫香
串だんご甘酒京都らしい店 白柳
一坪のびさ甘酒売る老舗 進之助
名物と言う甘酒屋へ女連れ 三司
甘酒の熱さを母が吹いてくれ 葉光
甘酒の一本箸へ塩こんぶ 三司

甘酒を吸う口元になってくる 徹也
甘酒屋こは祇園をぬけてきて 古方
甘酒へ旧道のさくら散ってくる 水客
(蒲佐清記)

淀川支部句会 (大阪市)

木村水堂選

十四でベッドの付き合ひ事が足り 一鶴
付き合ひの範囲を刑事調べ上げ 生薑
付き合ひもなく変人金を溜めさざす
付き合えば噂と別なお人柄 本堂
頓死してから有名な人になり 幽谷
有名になって妻との溝が出来 句念坊
金器様のアダ名帽子を手離さず 花村
有名になって妻の盛忘れがち 陽子
記者がくる妻持ち二階から下り 清生
ゴシップを有名税にして笑い 六童子
会心の作へ名匠意識せず 若菜
有名な妻で食事はみな出前 東洋男
日本の顔と云われておちつけず 香林

にしなり支部句会 (大阪市)

後藤梅志選

早春へ今年をかけるプロ野球 清人
あたたかいひざしに春のおひさ 慎太郎
手のひらにもう春と知る化粧水 水客
右翼とは暴力団と決めており 良
動物園みんな見上げている 連
キリンの首ゆらりと高し空の青 葉平
首長う長う気弱にいるキリン すくむ
四ツには見えず人形の髪を結う 牧人
人形のお七に似たる炎える恋 大然
小さいのにドライ人形欲しがらず 生薑
人形の中でキューピー 楽天家 唯義

春立つや人形の手足桜色 六童子
流行に人形ながら疲れはて 凡九郎
ちよとい事を言うなで首を振り 旅風
首筋に女の意地を見せて生く 大芽
待った無し勝負に首をかけて 満潮
晩年を汚す恋首巻をして 薫風子
亀の首思い思いの方へ向き 梅志

玉造支部句会 (大阪市)

西出一栄報

定期券相見互いに席をとり 守信
ちよとしたスリル他人の定期券 喜久堂
課長へは嫌とも言えず頭かき 井平
埋め合せ今度は僕の払う番 句念坊
埋め合せする気で誘いおごる 正一
費い込み親の涙で埋め合せ 白柳
入れ知恵がハバンと判る話 由子
税務署で答える言葉聞いて行き 文秋
冷汗をかくて入れ知恵引下り 清子
入れ知恵のここから先は聞いて 凡九郎
君吹きこまれて来たなと見破られ 一栄

阿倍野支部句会 (大阪市)

金井文秋報

春先きへ口より心の軽い朝 計光
美粧院待たせる雑誌あてがわれ 塚子
美粧院顔のかたちもたのみます 宏子
ともかくも顔にあわせる美粧院 一三夫
美粧院涙ぐましき顔並ぶ すくむ
買主がマニアと知って値が上り 光福
ピカソ展気まぐれらしい画が並び 山椒坊
気まぐれに覚えた事でくらし立て 喜仙
気まぐれに来たような顔で監視に来 文秋
気まぐれの筆とも言ふ枯れている 生薑

気まぐれに出たを正座と据えられ すくむ
気まぐれに手相へ立つた社長さん 路郎

ハワイ支部句会 (ハワイ)

築山快夢起報

恩に着せるつもりあれもこれと呉れ 魔花寛
恩知らず自分の事は恩にきせ 朝風
恩は恩貸は貸よと割切られ 浅太
恩の事話せばそれで米なくなり 須磨子
恩に著る弱き卑屈な気にもなり 斧平
親の恩どころか年寄り邪魔がられ 柳山
旧弊と言うな俺には恩がある 柳葉
何時までも恩を売る気で五弗貸し 平八郎
恩に着ると言うた借金ふみ倒し 内海
受けた恩返さぬ先に彼は近き 儀一
出世した人へ昔の恩を着せ 弦月

業成って受けた恩義を思い出し エホ子
結局は恩を感じて嫁き遅れ 曉舟
恩に着ますわと彼女の眼の動き 峯園
民主主義親の恩など遠くいる 泉水
一粒の米を拾わせ母の恩 銀水
謝恩大売出しどこ迄人をなめる気か 万里歩
恩義を越えて差出す救の手 紅涙
おおきくと恩に着たな礼を言い 青風
子沢山御恩を返す暇もなく 萩路
恩返し何の事かと孫がきき 快夢起
老いの身をいい恩給で日をつなぐ 周防
恩給で気楽に暮す花作り 玉屋
師の恩は忘れず坐り込み 紅茶
恩人と言われる身なり手を収め 緑星

浜寺支部句会 (堺市)

食品と科学

食品と原材料・機械・包装の総合誌

5月号発売中 130円 (〒12円)

特集

チューインガムブームの背景
新しいパン生地の改良剤
菓子と食品香料

講座

② 検査の活用
③ 官能剤の特徴
④ 食品活性剤の工業
⑤ 食品罐詰粉

◇ 海外ニュース ◇ 特許ニュース
◇ 意匠ニュース ◇ 商標ニュース

〔展望台〕主食・罐詰・菓子・飲料・添加物

食品と科学社

大阪 6702番 大阪市北区 9373-1

川村好郎報

厭長を出せと日当にするつもり 圭井堂
責任もとれず頭ばかり下げ 南宗
世間が悪い政治が悪いと働かず 好郎
責任を割勘にして出ししぶり 生々庵
責任と別に既決の盲判 裕邦
責任をとったつもりが仇となり 八重子
責任はお持ちしますと売り上手 新石
責任をとって運がまわって来 さい子
運動員違反はみんな背負わされ 狂二
責任者出せと騒いだかすり傷 貴山
責任上座料の費用払わされ 末一
責任が幹事を酔えぬ人にする 雄声
狭い家にババの玩具と児の玩具 凡子
父親が作った玩具喜ばず 楓子
時々のサーブスぶりが目にかない 敦子

川維 京都支部句会 (京都市)

田中鳥雀報

茶釜さらさら独りの部屋に満ち足りぬ つる子
これは東大寺南大門の壁の中の竹の一片 ゆきら
美しい仮病羽織をひっかけける 紫蘭
食べよとも言わず仮病はほつとかれ 生薑
こけの間にすみれ一輪彩をそえ 美佐緒
色彩が寄り添うハイボール五百円 正夫
街の娘が帰る菜の花真盛り 晴芽
手頃な距離に夫を置いて愛してる 礫
投げつける手頃なものがないいかり 烏雀
手頃の話題も感情のものが行くと 真砂
勝手にしやがれドドンパの足音 枯粒
日記帳の余白うめる詩を書きながら 千潮
草場まで少し余白があるらしし 司郎
添削の朱筆余白へ一寸褒め 和三郎

川維 岡山支部句会 (岡山市)

浜田久米雄報

混雑を指定席から見おろされ 哲郎
鼻声に規則少うしくすれかけ 三平
風邪気味へ待たれる春のいよきさえ 若菜
隣まで風邪が来ているよとさとし 久米雄
恩給の話農夫は座をはずし 秋月
規則におりに云えばあんたは固すぎる 一声
規則にも情があつてうれしがり 楽天
お隣りは婆さんだった指定席 鈴ん坊
新薬の出たころ風邪は先を越し 博
規則には勝てず十円追加され 東岸
恩給があり安んじて雨読せん 香林
ダンブカー交通規則よく忘れ 輝次
三百は規則の盲点だけを 半翁
めくら判たべた並んでる規則 鮫虎狼

川維 米子支部句会 (米子市)

小西雄々報

針までも母は数えて縫い終り 素甄
飲代も稼いでくれるミシン針 翠月
お針などめんどろとぞいとに 出福女
縫針のうまさ明治の母がいる 三舟
小児科は背へ注射をかくして来 さい
井戸端とムードが違ふPTA ユリ子
おしゃれて来いと子の言うPTA 節枝
美しきものに老母の茶の点前 蛙眠子
雛の灯へ一家賃いい息を抜き 青香
本心を言えない嘘を信じられ 無閑
幸せは不平の言える親を持ち 一保
月曜日六日生きる仮面つけ 天邪鬼
法律の抜け穴これも金次第 鶴丸
箸紙の民謡習う観光団 一机

主人敬白昔氣質がまだ残り 篤司
占のようにには恋が成就せず 奎
安米節のせて観光バスは行く 不三子
先生の思想に困るPTA 雄々

川維 広島支部句会 (広島県)

平田越舟報

デイトする秘密の場所は二人だけ 吐川
父親の秘密を知って暗くいる 方川
長島を夢みて少年バット振る 昌幸
TVのコマシャルきれいな指ならべ うしを
少年の良きブレイキのない笑い 上利
来た来たと云う親指がふれ歩き 一荷
敵国に秘密兵器のある焦り 美文
秘密みな伏せて夫婦はむつまじく 二三夫
お互に秘密がなくて家明し 洋児
マニキユアの指が姑の気に入らず 越舟

川維 篠山支部句会 (兵庫県)

酒井ひか平報

恋を得てバーのムードを忘れかけ 青峰
ニューホームそのカーテンの悩ましき みのる
ピンクムードショール済んだ四十寝るとする 可住
もやもやとさして一杯二千元 永断
受験する子へテレビも消して父と母 澄代
愛情の薄れを感じ胸さわわぎ 泰子
節酒解禁実家じゃ妻も飲ますなり 白猫児
愛情の切れ目を温泉に來てつなぎ 可住
冷蔵庫値上げムードへ話め込まれ 左文字
ムードどうあらうとも財布詰りめめ ひか平

川維 高知支部句会 (高知市)

大西迷窓逸

おでん食べ帰れば女房おでん出し 幸枝

色紙短冊
書画用品

大坂戎兵

丹月堂

電中セニセニ

いしらしさおでんへ御馳走様と云い
耐おでん分相応に酔うて去に 香洋
二次会をおでん屋にする領がき 俊一郎
新妻を連れておでん屋素通りし 千佐子
ラッシュニアワー命もかけて出勤し 利子
我が道は平凡ながらあやまらず 久江
我が道はただ御仏に出合う道 勝景
我が道を月も照らしていてくれる かつみ
日本髪結うてもみたい洗い髪 古城
洗い髪びんのはつれのゆれも 婦蛇
孤独ふと春の日本を髪洗う 酔雀
洗い髪もう年頃の身のこなし 柏子
髪洗っているのにおしつ云うて来て 迷窓

杏林川柳会 (大阪市)

旅先の田舎銀座で羽振り見せ 野添路
盛り場をふり廻りして寝る 阿茶
盛り場のビラは男にだけくれる 瑞枝郎
盛り場にこんな便利な裏道 生々庵
稽古すりや上るノドだと皮肉られ 瑞川

皮肉さはいらなひとこへ又生れ 小石
テロ犯を捕えてみれば検事の子 一哲
盛り場の火事新鋭車どつと来る 一伸

大阪通信病院川柳会 (大阪市)

橋本幸男報

チンピラの度胸刑事も舌をまき 春
女の度胸にするずる引ずられ 愛
泰然自若として腰をぬかした度胸なし 風船堂
胃袋を取られて肉がつき始め 春
食うだけと云う胃袋で端に座し 夏
胃袋がびくりとしますビタミン剤 宏
灰にすれば瘻と持病笑われる 好
けちんぼは女難の味も知らず老い 竹
債務者であるのに女はとくかず 竹
昔から女難のあったおじいちゃん 青
酒煙草やめても持病同じこと 没
調剤もお手盛り持病やみつづけ 草
その顔で女難の相とは恐れ入る 露
追われてる女難仕事手につかず 幸
女難ですよと淋しい笑なり 路

帝化川柳会 (大阪市)

谷沢好祐報

老いたれど春は楽しいものとせん 孝
春日和帽章まぶしい一年生 柳
春を待つ堆肥を寒の風に入れ 好
聞くだけで今年も過ぎた花便り 晴
華やかに娘が媚びる春化粧 蒼
新薬の効かぬ病に伊吹山 九
回復期薬時々忘れられ 雄
波寄せてハイヒールの跡消して行き 風
男波女波二人の恋に蟹が寄り 京
成長の波にも乗れぬ炭を焼き 雅
堂

南海電鉄川柳会 (大阪市)

辻圭水報

私鉄では駅長さんも愛想よし みなつき
私鉄だけあってチョロピリ庶民性 句念坊



私鉄なら旅行した気にならぬ子ら 和
トラックとバスに私鉄は泣かされる 圭
私鉄みな僅し物の春になり 宏
親も子も同じ私鉄の飯を食い 路

羽曳野句会 (羽曳野市)

川村好郎選

昇給の笑顔もいつか消えており 茂
退院の笑顔も入れて撮り 天
マネキンは笑顔も消して一と休み 史
とつと笑顔でお内儀つけを出し 好
親も子も揃って笑顔一年生 仁
あやしげな笑顔へうぬぼれついでゆき 一
遅くとも笑顔でむかえる女房もち 博
春斗へ社長妥協を申込み よしあき
プロポーズしてからあの娘は高姿勢 清
肺病にスピード療法ないものか 進
スピードの時代に郵便遅れおり てい
無理しなやと見舞の妻の身を案じ 健
通り魔のまよひに消え去るグッチョコ 美
スピードにかけた命か今日も散り 有
思い出せぬ笑顔へ笑顔返しとき 好

明和川柳研究会 (西宮市)

樋口舟遊報

身しろぎもせず冬山に相對す 千
魔の山と見えす初日の下にあり 蕨
先約を捨てさす程の美貌なり 夢
十字路に立つて理想を変えてみる 照
洗濯が乾いて妻にいい旗日 六
巻きついた旗が気になる午後三時 梅
籤買つて見たい日もあり買わず帰る 三
人間の弱味ねらう籤があり 舟
葱さけて郊外の友達遊びに來 半
寒空へ葱青々とつやのよし 青
葱さけて男は夢を見失ない 杏

コクヨ川柳句会 (大阪市)

川口理休報

先輩の辛らさなりけりバーのつけ 留
寄附募集よくぞ俺まで探したな 龜
若さだけ取柄のような奴も並び 正
違反するみうとに負けてラッ飛ばし 柳
違反だけしなやと母は怪我案じ 理

333川柳会 (堺市)

林元歩報

出しやばった梅だけ残る掃り道 好
関係もないのに出しやばり腹を立て 南
出しやばつておいて最後はうまく逃げ 新
出しやばりに声かけるのも氣を使い 楓
出しやばりの親切だけが身にしみる 綾
家庭調査親の出しやばりわきわしい 八
インタビュすれば豆歌手こましくくれ 江
声変りして豆歌手の曲り角 摩
豆歌手の方が納税上になり 狂
墓一つ舞台を淋しいものにする 一
大名の墓とも知らず赤とんぼ 圭
雄

富柳会句会 (富田林市)

阿部柳太報

何なりと喰へるときなはれ松の内 美
年賀状別れた筈の女から 静
かずのこにありつくまでの礼廻り 吉
新年となれば血圧また昇り 八
日曜をさけて農協バス旅行 謙
日曜日トランジスタ床に入れ ひ
恋人の指美しい堀こたつ き
間貸して電気こたつに気がつかれ 東
こたつから芽生えた恋で母となり と
流行の赤いアロハで風をきり 弘
あかぎれの手に流行のワニの皮 とも
厭伝よ無事故であれと雨の中 周
ゼッケンの冷雨へ傘の母が立ち 柳
声援へ市長も傘を脱いで立ち 尚
厭伝の雨にも市長さん来てはりま 摩

大萬

梅里の店

★大万川柳(第百二十三回)を募る
兼題「老練」路郎先生選
締切・五月十五日 (五句以内)
発表・五月廿一日 (店內掲示)
投句先 阿倍野区松崎町三ノ二
大万川柳会宛

酌よし 千日前大劇裏
TEL②二七〇
味よし アベノ橋近鉄地下
TEL⑦〇一四七



柳 室

★ことしの春は吉野あたりで観桜句会でもやろうと考えていたが、多忙多忙で、僅に万代公園の夕桜を編集の三夫君と雲子女史と奈良支部の敬太君とで見たに過ぎなかった。もう新緑で、池のハタの柳が眼のさめるような緑である。

★前号もお蔭で好評だった。高須三味氏等の東京座談会も前号と今月号の二回に亘って発表することが出来た。ご愛読が願いたい。今後とも絶えず新鮮な読み物を提供したいと思っているので、読者からの新企画も寄せられたい。

★拙稿「名句と難句」は句によっては、実地調査で多くの時間を割いている。後世の古句研究家の骨折を少しでもすくなくして、充分に句の鑑賞が出来るようにして置きたい念願に外ならないので、それを思うと、少々苦労は意とせずに行きたいと思っている。

「健舌の4B」の方は、愛読者の諸君と対談でもしているような気持ちで、私の言いたいことを書きつけてゆく積りだ。これは私の健在を知らせる告知板でもあると思っている。

★相変らず遅着などがあって大変ご迷惑をかけていることを衷心からおわび申し上げる。こちらはどんな難関にぶつかっても、へこたれずに発行を続けているのでご協力をお願いする。しかし病床から首を長くして待っていられる人のある事を知るとホロリとする。

たれずに発行を続けているのでご協力をお願いする。しかし病床から首を長くして待っていられる人のある事を知るとホロリとする。

★不朽洞会の人々が漸次、外遊することとは何んと云っても愉快なことだ。初夏の頃には中島生々庵不朽洞会理事と、河村瑞川氏が外遊するし、秋には若本多志不朽洞会副理事長がかけける。元気な人たちは出来るだけ視野を拡げておくことだ。

★旅はいいものだ。常日頃の忙しい仕事から解放されて、胸のひろがりを覚えるものだ。外遊の出来ぬ環境の人たちは、つとめてひまを見つけて内遊することだ。内遊も行ききよによつてはバカにならない。その時こそシンと川柳眼を働かせて、多くのものを採取して来ることだ。

★では、皆さんの健康をお祈りしてペンを開く。(路郎)

▼ ペンの散歩 ▲

▼新緑——語感もいいが、すべてが躍動的で五月の風に若い女性の装いも美しい。

▼科学の力はずいぶん宇宙人第一号をこしらえた。空想小説ではないのだからスゴイが、青く見えたという地球のあつちこつちでバデな殺し合いはいただけない。

▼川柳まつりは7月16日(日)としまり特別課題も表紙の二に発表した。その題のように地方からも

「気軽る」にご出席くださるよう今からプランを立てておいでください。(一二三)

☆ 五月句会・川柳支部

☆宇宙句会・7日(日) 一時半、題、鮑・鯉のぼり・ビタミ・条件。所、宇部市東区恩田長沢津秋六花居。☆かがみ句会・2日(火) 七時、題、レット・自信・ベテ・ン師・有頂天・耳うち。所、池田古心居。☆玉造句会・10日(水) 七時、題、遊園地・ほがらか・舌。所、市電玉造南百米、大阪信用金庫。☆明和研究句会・14日(日) 一時、題、腹・庭・夢。所、阪神鳴尾駅東南二百米鳴尾公民館。☆京都句会・16日(火) 夕、題、落日・まほろし、蚯蚓。所、四糸繩手仲源所。☆阿倍野句会・17日(水) 六時半、題、やんちゃ・浪人・草花。所、旭町二丁目金塚会館。☆にしなり句会・21日(日) 六時、題、空・光線・誓い。所、玉出新町通り一ノ一後藤海志居。☆南海電鉄句会・18日(木) 六時、題、つり草・反抗期・株。所、難波高架下親和クラブ。☆米子句会・14日(日) 一時、題、わがまま・団体・忘れ物。所、米子市公会堂ホール。

不朽洞

★常任理事会

会から

定された「川柳まつり」の七月九日は中島生々庵理事長外遊中になるおそ

れがあるので七月十六日に変更する。

★理事長の外遊

中島生々庵理事長は六月九日羽田発で約一ヶ月の予定で外遊されることとなった。なお、本会維持会員河村瑞川医師も生々庵と共に外遊される。

☆新会員紹介

四月

▼渡辺曉重(愛媛県) 正

▼潮蘭氏(大阪市) 三月限り戸田喜榮氏(岡山県) は四月限り、家庭事情により退会された。(多)

●新刊紹介●

大阪弁入門

(前田 勇著)

大阪弁学者として知られている大阪芸芸大学教授の近著である。大阪弁ブームの今日、この本を読まないでは大阪弁については語れないであろう。一本を薦む。朝日新聞社(大阪・東京・名古屋・小倉) 発行。定価一九〇円。

正誤

▼前号九頁下段十六行目の句、スキ礼賛とあるはスキー礼賛の誤り。

▼前号二十七頁三段六行目、解答なしとあるは解答なら、同十一行目、味わえないは味わえるの誤りにつき訂正。

▼前号三十三頁四段十四行目の句、子沢山使いに出したのを忘

れとあるは使いにやったのを忘れる誤りに付訂正。(薫)

社の黒板

▼川維大聖寺支部は加賀市大聖寺市天神下町六番地へ移転。
▼西川晃氏(大阪市) は家業多忙のため編集部員を辞任された。

改名改号

木村匡利
号 水 洞
今後共ご芳情ご指導をお願い申し上げます

大阪市東淀川区
十八条町二丁目二二

木村水洞
旧号 水 堂

須崎豆秋 著

川柳 ふるさと
価一〇〇円 共

明和病院句集

句集 明 和
価一〇〇円
送費一六円

取 次 川柳雑誌社

若本多久志著 麻生路郎序

川柳 親ごころ子心

価 150円 送料24円

「川柳雑誌」の川柳塔及び近作柳樹の中から観ごころ子心を誦した秀句を多年に亘って根気よく拾い集めたのが本書である。登載された柳人三百余名、集句二千余は親と子の愛情が如何に深いものであるかを知らねることの出来る、実に有意義な書である。

東野大八著

風流 人間横丁

価 250円 送料32円

★異常な戦争にまき込まれ隻手となって帰還した著者のザックパランな人生批判が、その雄筆からほとばしるさまは凄まじい。まるで腕の冴えた板場の切れ味にも似ている。★本稿は戦後十三年間、「川柳雑誌」に掲載され、好評、サクサクと読みしものに補筆した雄編である。後半に川柳に関する卓見もあり、肩の凝らぬ読物としてお薦めしたい。

高鷲亜純著

詩川柳考

B 6型肉入 定価三百八十円 送料四〇円

★著者は曾て創生期ごろの超現実主義者であつたがその詩論は詩人の民衆的立場を要請した。今は柳界にあつて庶民の詩人的自覚を促す。ここに川柳雑誌社が誇る現代川柳批評家として世に送る。凡そ前向作家を自負する柳俳人必読の書。
★この送金は振替口座をご利用が便利で安全です。(切手代用可)

川柳雑誌社

振替口座大阪75059
電話 大阪 6081

大阪市住吉局区内
万代西5丁目25

発行者

あなたの句帖が出来ました



川柳雑誌社
大阪市住吉区万代西五丁目二五
電話 大阪 七五〇五〇
振替 大阪 七五〇五〇

★路郎好みだけに、すばらしく気がいっていきま。句会でお使いになるなり、抜けた句の整理にお使いになれば、何冊かで、あなたの句集の基礎が出来ます。又柳友への贈答にも最適です。是非ご利用下さい。

大阪一名古屋 2時間27分
ノンストップ

近鉄特急

大阪上本町発	7.00	8.00	9.00
	11.00	13.00	15.00
	17.00	18.00	20.00
近鉄名古屋発	7.25	8.25	9.25
	11.25	13.25	15.25
	17.25	18.25	20.00

ほかに 大阪・名古屋連絡
伊勢ゆき特急運転
座席指定 特急券
お求めは 二乗車の5日前から

近畿日本鉄道

printed in Japan

募集

課題吟募集

民謡	小西無鬼選
海岸鏡	小浜牧人選
鏡	太田良子選
白	戸田古方選
解	杉谷湖山選
住	木村水洞選
弁	(六月十五日締切)

毎号募集

近作柳樹	麻生路郎選
川柳塔	北川春巢選
文	麻生路郎選
章	(毎月十五日締切)

投稿規定

▼ 投稿は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記すること。
▼ 「近作柳樹」は一般作家の雅吟を募る。
▼ 「課題吟」は誰でも投稿が出来る。
▼ 「川柳塔」の投稿は不朽洞会員に限る。

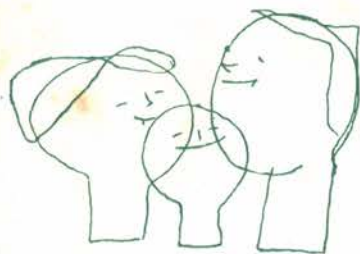
川柳雑誌 第三十六号

(禁転載)
半力年 定価 七〇円
一力年 四四四円
昭和三十六年 四月廿五日印刷
昭和三十六年 五月一日発行

川柳雑誌社

発行所
電話 大阪 六〇八一
振替口座 大阪 七五〇五〇

一家そろつてホーライ党



廣東料理



大阪なんば・TEL ⑥ 551-2

南紀 四国 淡路島
を結ぶ



■白浜口ゆき直通列車

第2きのくに……毎日 なんば発 12,37
週末準急くろしお……土曜ごと // 13,10

■新宮ゆき直通列車

準急なんき……毎日 なんば発 8,10
夜行直通…… // 22,07

■淡路島洲本ゆき 毎日 4便

① 8,12 ② 11,45 ③ 14,15 ④ 18,10

■四国小松島ゆき 毎日 4便

① 7,40 ② 11,00 ③ 14,00 ④ 17,30

のりば
大阪
なんば

南海電車

取次所 川柳雑誌社

川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。
絶叫・嘆息・嘆声・鳴咽——そうしたもろ
もろが十七音に圧搾された諷刺と諧謔の短
詩型、それは伝統的であると共に常に革新
的であるその川柳がいかんして發生し、経
過し、今日に至り、将来に動くか、しかも
その作り方は、味わい方は——以上を最も
明快にわかりやすく、斯界の第一人者たる
著者が答えているのが本書である。

—川柳の作り方と味い方—

川柳とは何か

送価 二五〇円
三三〇円

麻生路郎先生著

至文堂

東京都新宿区弘方町27 振替東京29507

麻生路郎著

好評嘖々

川柳の味い方・五百数十句

(毎日新聞評)

麻生路郎さんは明治三十七年か
ら川柳を手がけているというから
川柳歴はもう五十五年にもなる。
この新著は麻生さんが毎月出し
ている「川柳雑誌」に掲載された
ものを中心にその他の柳詩や句集
からひろった五百六十三句につい
て、ひとつひとつ丁寧な注釈を加
えて、鑑賞の手引に資そうとした

ものである。

句の方より実はその鑑賞文の方
がなかなかうがっていて、一気に
読ませる魅力がある。

発行所 川柳雑誌社

電話 大阪 ⑥六〇八一
北浜口港大坂七五〇五〇

価二五〇円
送料三二円
B6版
二五〇余頁